女學雜誌

明[illegible]月三十日發行

第六十七號

東京[illegible]之社

女鑑第六十七號目次

女鑑
避暑に就きて

論説
德川時代女子敎育史評論（四）……岡崎遠光
女子處世論（七）……三輪田眞佐子

史談
明石くに子……鹽井雨江
小澤嘉乃……安藤藤子

家政
看護法捷徑（四十一）……三笠舍主人

漫錄
あうむ文學（九）　橧の舍主人●あらずもがな　鹽井雨江●日本文學の女傑（三）　山崎庚午●井蛙小錄　井上賴文●風の詞　横井知萬多●道の志をり歌合（十五）　久志本常孝寄贈
忠孝二筋道（其八）……渡部乙羽
花菖蒲（其九）……千稻子

文林
歌　近衞忠熈●東久世通禧●鍋島直大●前田利嗣●諏訪忠元●黒川眞賴●宮地嚴夫●坂正臣●小出粲●谷勤●植松有經●大口鯛二●林甕臣●三浦千春●石丸忠胤●西川忍賀雄●佐々醒水●草野隆道●柴田顯光●千日亮●篠原政積●鍋島榮子●蜂須賀隨子●前田朗子●柳原愛子●小池道子●松平健子●保科彌子●烏尾廣子●北島以登子●服部磯子●諏訪晴子●田邊わけ子●安東菊子●尾崎すう子●師岡須賀子●河野文子
文　漁翁垂釣……横井知萬多
蝸牛を見て……田邊わけ子
ゆふだち……師岡須賀子

雜報
●大御惠●皇后宮の御仁慈●又●華族女學校の儉素●同校の卒業證書授與式●邪敎の害毒●北條侍從の學校視察●鳩山博士の夫人●音樂學校●東京女學館●德川大夫人●發擧●褒賞

敎の庭
歌文……數十首

口畫……明石くに子……高橋松亭
挿畫……忠孝二筋道……富岡永洗

明石くに子



女鑑 第六十七號

女鑑

避暑に就きて

樹々の若葉、何時しか茂り合ひ、杜宇の聲、何時しか、蟬の鳴音と變りて、日盛には、少の風だになく、天地も熱へ、金石も鑠えんとするばかりなる炎暑の、日に日に、重りては、如何よ堪へ忍ばんとすとも、誰かはえ堪へ得べき。斯ゝる時節よに、或は、函根、熱海の温泉よ浴し、或は、江の島、松島の海邊に遊びて、日頃の勤勞を息へ、半年の勉勵を慰するなど、其の身の分限に應じて、各、其の心神を養はんことを計るは、誠に、其の身の爲にも、又、其の學業、勤務の爲にも、宜きことなれば、名區、勝地に、其の目を娯め、其の懷を騁せて、或は、文學

の思想を長じ、或は、其の身體を養はんとて、旅立ち給ふも、諸孃の中には、必、多かるべし。

されば、吾人、聊、この避暑に就きて、希ふ所あり。抑、身を幽閑の境、爽涼の地に處きて、徒に、朝夕の眺をのみ、消閒の料として、日數を過ぐさんは、いと口惜きことなれば、其の名勝佳景の、目に觸れ、心を撼すものに逢ひたるときは、必、之を歌にし、之を文にして、自、其の技能を長ずるに足るべし。又は、文學、歷史などの書を繙きて、其の面白き節々を讀み味へなば、亦、其の益少からず。且、山の高に登り、海の洪きを望みては、精神をして寛大ならしむるもの、誠に、其の平生と、大に異なれば、之に就きても、能く、其の寛厚洪大の度量を養ひて、嶮き、小き心を去り、志は、山に似て高く、情は、海の如く深からんことを求むるも、

亦、大に、益あることにあらずや。況て、父母に從ひ、或は、兄弟を伴ひ、或は、友垣と同く遊びたらんには、其の益も、其の娯も、實に、極り無かるべし。吾人は、諸孃の、斯かる洪益ある避暑を爲し給はんことを希ふも、一は、德量の廣からんことを望み、一は、文學思想の發達を期し、一は、精神身體の養成を計るなり。一たびの避暑にして、この三ッの利益あり。この利益は、唯、一時の事にあらずして、一たび得て失はざれば、將來の益なり。諸孃、果して、能く、この三ッの利益を空からしめずして、併せて、其の極なき娯を得給はゞ、學校の間暇中に於いて、其の身に得る所のもの、亦、幾何ぞや。

いふことの違はぬ物にあらませば　（後撰集）
後うきこともきこえざらまし

論説

徳川時代女子教育史評論（四）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（中）

維新前の教育は、之を、男子養成法の上より觀察する時は、德義の教育を以て、第一とし、次に、知識の啓發を求め、身體強壯の方便を講ずるは、第三位たりき。而して、之を、女子養成法の上より討究する時は、最大要務は、德義の觀念を蓄へしむる事にして、身體の強壯、之に次ぎ、知識の增進に至りては、女子には、殆、不必要のものと見做しぬ。即、何れも、德育を、緊急の事としたりと雖、第二、第三の教育に至りては、女子と、男子とは、其の趣を異にして、彼の有名なる白川樂翁公すら、女子には、才學は、無くてよきものと、其の著書にい

へり。是、男尊女卑の主義を實行せむには、女子の見識をして低からしめ、而して、其の見識を低からしめむには、其の才學を、低處よ沈淪せしむるに若くはなく、つまり、女子を、機械的に活用せむとの考より、男女の教育が、此の如き相違を來しゝものなり。

女子を、機械視し、之を、機械視する男子の掌中に翫弄せしめて、其の自由に委ぬるは、吾人の、大に、反對する處なりと雖、理屈はさておき、之を、事實上より論究するも、女子の性質は、活動事業に適せずして、穩和なる動作に合し、古今東西の歴史を通觀しても、矢張、社會の活動する波濤に躍り出でゝ、之が舳艫の勞を執りし者は、大抵、男子に屬せり。故に、益々活動する此の社會には、活動する性質を有する男子が、活動する性質の少き女子より、其の權利を卑しう

すべき筈なく、未來永刧、女子は、男子の後にあるべし。たとひ、男女同權などいふ烟か、雲かの議論を主張する赤髯の唐人と雖、決して、全體、凡て、同權といふ事は、實行し難き事、西洋の政治界、學術界を見ても明白なり。勿論、或範圍に於いては、男も、女も、義務を均しうし、職分を同じうするを以て、男子に、一歩も讓る可からざるものとす。即、國民の義務として、國利民福の爲に、其の心身を勞し、親たる職分として、其の子女を教育する如きは、男女、何れも、同一の義務、職分を有する者にして、此の觀念を、女子が有したる事は、正行の母、忠興の妻等の履歴を見ても、知り得べし。然るに、德川時代の人が、女子を教育せむには、絶體的に、男子に屈服して、理ある事は、いふまでもなく、非なる事にも、之に從順なれと勸むるに至りては、吾人は、此の教育の下にありし

名媛才女に向ひて、千斛の涙を濺かずばあらず。今日、絶對的に、保守主義を取りて、此の如き教育主義を實行せむとする者あらば、是、親、又は、夫が、國民たる資格より外れ、親たる職分を誤る事ある時も、其の妻女たらむ者は、良心の刺衝あるにも拘らず、相率ゐて、國民にあらざる民、親にあらざる親たるより甘むぜよと勸むるに異ならず。愚も、亦、甚しからずや。

吾人も、教育の本旨は、德義の涵養を以て、最大急務とする者にて、殊に、日本人の如く、德行と、義氣とを以て、滿身を錬り上げたる人民には、益、之が培養に、手を盡くすべきは、世人の説に贊成す。然れども、德義の問題にも、自、消極と、積極とあり。維新前の女子の德義は、多くは、消極的より走りて、貞操とか。從順とか。ひたすら、己を持する事のみよりして、進むで、他に及ぼす事よ

至つては、人の、之を勸むるもの、希なりき。一身より一家、一家より一國に及ぼすといふ詞の如く、一身の德行修まりてより、滿天下の德行も修まるべき筈なれども、唯、深窓の下に、引込み居る女子一人の德行が、如何に修まりたりとて、これが爲、一國家の德義に、大なる影響を及ぼすべき道理なし。若、かゝる女子にして、社會の空氣に觸れて、朋輩の交際も廣く、書面の往復も繁からしめば、勸誘、忠告の道も開けて、他をして、其の德行に則らしむるにおいて、便利のありしや必せり。然るに、方策の、此に至らざりしは、德川時代の教育家が、一方に於いては、頻に、德義涵養の必要を說きながら、一方に於いては、德育を普及せむとの方便を誤解したるものなり。殊に、知識の度を低うし、德義の度を高うせむとしたる故に、無分別な、道ならざる道をも踏ませて、果は、人な

らざる人を養ひたり。貞操なり、從順なり、知識の、之に追伴してこそ、始めて、眞正の貞操、眞正の從順となるなれ。誤解にても、無理にても、女子は、幼き時は、親に從へ。長じては、夫に從へ。老いては、子に從へといふ時は、女子が、天恩を受けて、此の大世界に生まれたるは、牛馬と、其の等を同じうせむが爲なりと謂はざる可からず。而して、德川時代の男子は、女子を敎育するに方りて、大抵、此の方針に近きたり。あはれなるかな、此の女子。

寺小屋敎育は、不完全なる敎育には相違なきも、文字の知識を得る事と、德行の本旨を曉る事とを、一擧兩得になしたるなどは、中々、巧なる處あり。別して、父兄が、其の子女を托するは、敎師たるべき人を信じての事なれば、子女は、敎師の指揮に從ふは、父母の敎に從ふに同じとの觀念を有し、敎師も、亦、生徒を

導くは、猶、我が子女を養成するが如き心地する故に、師弟の間、自、親密になりて、今日の泛々たる師道の如き事なかりしものゝ如し。されば、德義涵養の點に於いては、甚、其の功を奏したり。然れども、當代の學校敎育には、體育といふものなく、男子に取りては、武藝を講修する處ありて、己が身體を强壯にすといふが主眼にあらずして、戰爭に出でゝ、人臣武士たるべき業務を盡くすが目的なりとするも、其の筋肉を逞しくし、膽氣を養成するは、實に、今日の體育に異ならず。されど、女子に在りては、二三、奇を好む者が、剃刀、鎖鎌を遣ひしまでにて、一般の有樣よりいふ時は、體育として、體育したる事なかりしと謂つて可なり。『いなご草』、其の他、二三の書によりて、古人が、女子の身體に付いて、如何なる考なりしかを討ぬるに、『朝起は、藥なり。』『活くは、身の爲』

などいふ文字はあるも、僅に、安眠坐食の害なるを、言を換へて戒めたるに過ぎず。殊に、其の習字讀書を督促するに方りては、鑿壁刺股の昔物語までも引き來りて、腦の倦厭を催し、身體の疲れ居るにも限らず、父兄は、尚、之に鞭笞して、過分の課業を強行せしめしなどは、其の身體の破壞や大なり。然れども、女子に對しては、かゝる事少なく、且、子を生むといふ天職あるが故に、其の産前産後の如きは、一家擧りて、其の身體の健全に注意したり。又、前にも述べし如く、精神を活かせる事、甚、僅なるを以て、其の身體の疲勞、亦、僅なれば、比較上、男子よりも、女子の長命多かりしは、女子に取りて、不幸中の大幸福といふべきか。

女子處世論（六）

三輪田眞佐子

第七　世間の情態を識別すること

女子は、如何なる故にや、世の情態を、少しも考へざるを以て、屢、失敗を招くことあり。蓋、婦女の常として、井底の痴蛙と等しく、偶、書を讀み、文を書き得ば、無二の秀才と、自誇り、あるは、良人、門戸を、廣大にすることあらば、其の地位と、資力とを思はずして、奢侈の生活をなし、あるは、自分の兒女等、狡猾らしき戯言を吐けば、則、神童なりと、他に慢り、遂に、家庭教育を誤る如きことより起る失敗のみなり。こは、多くの女子は、無學にして、深窓に閉居し、未、世界を知らざるより、比較的の判別心乏しきに由るならむ。いざ、學びて、眠れる心を醒ませかし。されど、をのれは、彼の外國ぶりのみを尊び、女子

は、家事を抛ち、男子と共に、世界の表面に顯れて、奔走せよと云ふ論者に雷同するにはあらず。唯、人生の情態を知らで、非望の希願に迷ひ、救ふべからざる失敗に、な陷りぞと祈ればこそ。思ふに、猛き虎豹も、何ぞ、海底の事狀を探り得む。內事を治むる女子に、外事に精しかれと責むべきにあらず。須らく、知るを知るとし、知らざるを知らざるとするこそ、人生の情態を知るといふべけれ。例之ば、牝鷄、晨になかば、禍起るならむと、自愼むものは、反へりて、人生の情態を知るぞかし。古人の、女子と、小人とは養ひ難しとか。女子、近くれば不遜。遠くれば怨むとか言ひしも、女子の、世の情態を知らざりける咎なりけん。

君子は、世と推移すとぞ。若、能く、身を處せんと思ふ女子あらば、亦、能く、

世と推移せざるべからず。されど、諸孃、此の句を以て、女子は、世の風潮にさへ諂らば、別に、自己の定見なくも、妨なきことを意味せるものと、は思ひそ。元來、推移とは、惡風ならば、和して同じくせず。善俗なれば、進みて同じくせんとの意義ならん。久方の月は、そなたの池も、こなたの河も撰ばで、水に映るなり。これぞ、推移の姿なる。おのれ、聞く、佛者に、同事てふ敎ありと。そは、幼者は、幼者の心もて、之を導き、老者は、老者の心もて、之を安んぜんと如く、總べて、人に接するに、各、其の心に同じき心を以て、之に接すべしとの意義ならむ。實に、世は、種々なる人の集合なれば、此の情態を知らで、などか、人心を歸服せしめ得べき。抑、云ふは易く、行ふは難きものなるにや、和すべしと言へば、同じくし、同じくする勿れと言へば、和せざるは、人の恒なり。

されど、人生の情態は、浪華のあしは、伊勢の濱荻、處かはれば、品かはるべきに、近來、異邦に倣ひ、自由結婚の論に迷ひ、一身を、不幸に陷れ、若くは、婦姑別居の說に欺かれ、禽獸の行爲をなす女子さへあり。あはれ、彼等は、其の身、しき島の日本の女子たることを忘れたる乎。國是に背き、身を處せんと欲するも、豈、終を善くし得んや。

世の中は、道理のみ行はるゝものにあらず。感情に支配せらるゝことも、亦、少なからず。例之ば、祝日に、餅、赤飯などを、知人に贈り、年頭、歳末に、趨禮を行ふ如きものは、道理上より論ぜば、由なきことも多からん。されど、境に入りて、國禁を問ひ、鄕に居る時は、鄕俗に從はんは、隣保の禮を全うする所以なり。若、物しり顏にて、世の感情を害するものあらば、反りて、樂しき生活をな

す能はじ。故に、正義に戻り、不善に與せざる限は、親戚、及、知人間の習慣とを察し、之に違ふべからず。勿論、自己の見識を失ふべきにはあらず。今日、學校のみの敎化を受けし女子の、世人に容れられざるは、此の理を知らざるに由るならじ。諸孃、心してよ。

水底の月、眺めむとせば、漣、之を亂し、鏡裡の花、折らむとせば、手、之に達せず。されば、事物の外觀は、恃むに足らず。未、掌中に落ちざる寶は、寶とするに足らず。この情態を悟らざるものは、恒に、愁歎と、失望とは免れじ。「おのが身のおのが心にかなはぬを思はゞものは思ひ知りなん」と。和泉式部は詠まれけり。あはれ、世海に經驗あるもの、誰か、この感なからん。されば、この情態を、後進者に知らしむるは、將に、先覺者の任なるべし。思ふに、血氣盛なる子

女は、馬耳東風に、之を聞くならんも、異日の悔を避けんとならば、夙に慮り、實着の世路を踏むべし。豈、人生に、因果應報の理と一致せざる間道あらんや。古人いはく、誰出不由戸。何無由於此道也。

富士の嶺 烟も絶へ、長柄の橋も朽ちにけり。刹那、之を思はゞ、人生の情態を知り、變に處する必要を感ぜざるものなかるべし。抑、變に處する道、他なし。須臾も、人道を離れず、終始、人事を盡くして、禍を、未發に禦ぎ、總べて、失望に陷るものは、多く、非望を懷くに基き、未來の安樂は、現在の苦勞より生ぜんなど、所謂、人生に伴ふ無常の情態を、有常の心力を以て識別し、從ひて起るものは、從ひて、宜に處するこそ、人生の道ならめ。

史談

明石くま子

塩井雨江

あはれくに子。誠に水穂の國の實も花も清くうつくしく、誠に日出る國の心も道も明く正しき女子。いでや、千里のくま萬代のきは、やまと島根の女子の鑑ともなさまほしや、くに子。

あやしき筑紫の鄙わたりにも、程遠からぬ長門の國、阿武郡の萩といふ所、南片河町といふ所に生れたる人にて、父は明石彌十郎といひ、母はもと子とよびぬ。くに子幼くて、西東更に見わくる空もなかりし頃より、能く父を敬ひ母を尊ふべき事を知りて、父の敎へたる事にあらねぞならはず、母の導く方にあらねぞ尋ねず、唯、たらちねの敎の庭の露のみを、起臥の賴み所としたる撫子の、やさしき心もてる女子なりけり。

くに子が父は、いやしき商人の中にも、いやしき商を營める者にて、僅かなる物擔ひて、ちかきわたりの市中を賣りわりき、細かなる利益を取りて、そを朝夕の薪炭、細

き經を立てたりしが、親子三人、六つの袖をかたしきて、諸共に恙なきを思ひ出でにして、さすがよ起臥したりけり。

くに子が妹を、りむ子といひたるが、そが分娩れたる時、母なるもと子は、産後のけしき思ふやうならず、腰の痛み、こよなうはげしくて、つねならぬ悩みに、乳さへ一滴も出でずなり、赤兒のなくね、かれ〳〵にならむずるや、童ながら、兼てより柔和しきくに子の振舞、幼き身、力なき手に、かい〳〵しくも妹をかき抱きて、此處にかしこに乳を貰ひありき、父母の賜の、たま〳〵さづけ給ひし妹、わが身にそへて守らではと、やさしうかなしう心を盡くす事大方ならず。赤兒の餘念なく眠りたる時は、母の藥をわかし母のいたづきを慰めて、片時はとりを去らず、妹のめさめて、母の懐をかいさぐる見れど、乳や欲しからむと、やがてかい抱き行きて、片時も怠らず、まめやかにしたりける心の中のゆかしさ、花ならぬに月ならぬに、何となう染むる筆に、匂ひこぼるゝ心地す。くに子が苦心焦慮、世にあまるべかりなれど、もと天地は心なく、鬼神は情なし、宇宙遂に無情の境界。ひさんなるかな、母なる人の腰の痛き、遂に快からず、七年にあまる病床、思ふにまかさぬ轉身の、

はてはいつしか立居もえならぬ蹇となりにしか。むざん、さてこそ無上の恨みなりけめ、孝女の心中。げにや。くに子の悲境は、天の涯地の極、更にはても知らぬさまなりしがせめて、母の玉の緒ばかりは、つなぎとめたるに、孝情のなほ結ぶべき方あるを、せめてもの思ひ出に、思ひ慰め、それよりは、又一層あつき孝養。父なる人は、朝夕のたつきの業に忙しくて、柴のとぼその、あけてより暮るゝまで家にもあらねど、母の介抱妹の養育、唯年歯もゆかぬくに子が一身の辛勞。されど、孝女は露でかり苦しとも思はず辛らしとも思はず。妹のむづかる時は、あれよこれよとこしらへ、ゑめる時には、又柴こる翁ものろふ嫗の物語り、かれこれと語りきこゑ、又妹のよねむなげに遊ぶ時は身のまはりを心づけ、すや／＼といぬる時は吹く風をきづかひ、妹をやさしういつくしむ心かく誠に上もなきぞかりなりき。又、母の立つ時は杖となり助け、坐する時は柱となりて支へ、母のさめるまはいたはり、いぬるまは擦り、母の飲食につけ、起臥につけ、始終側らを離れず、介抱孝養、母をやさしうかしづくさま、又上もなかりけり。

くに子は、やがて十六の春秋を迎へぬ。よの人にしありたらんには、花の容色をこ

らし、月のいろかを磨きてのみあるべきを。あはれ、くに子の心、萬胸唯孝養友愛の情にうづもれ、父母を思ひて我身も知らず、妹を思ひて又我身もおぼえず、思ふ事は、唯、父母の上妹の身のみ。いかでか、わが姿をかにとも、わが身をかくとも、かへりみる心あらむ。緑の髪、花の面、雨風のつらきにまかして、更らにつらしともせず恨みともせず。身にまとふ衣も、衣のよしあし、色のこきうすき、袖の長き短き、さる事は問はず撰ばず顧みず。身も忘れ、姿もうち捨て、余もおぼえで、唯母の病を看とり、妹の生長を守り、父の勞をいたはりたる、稀世の孝女。あはれや。萩なるくに子の家よりは、八里ばかり隔てたる大津郡の大日比浦といふ所に、西念寺といふ淨土宗の寺ありけるが、住持は名僧のきこえ高かりけり。くに子の家も淨土宗なりしが、母なる人は、むづかしき身を思ひ煩ひ、一度詣でゝ、ありがたき佛名をきかまほしと思ひぬ。母の望む所、なにかはためらふくに子なるべき。母を勞りつゝ、かひ〳〵しくも、自ら背おひて、濱崎といふ所まで至り、其處より渡船を求めて、瀬戸崎浦といふ磯に着き、又一里あまりの道、母を背おひて、遂に西念寺に詣で、佛事を行ひ、佛名をきゝ、母のよろこぶを見て、われもよろこび、いそ〳〵

と、また母を背おひて、一里にあまる道、瀬戸崎の浦わにたどりつき、渡船を求めて、濱崎に歸り、其處より又背おひてなむ家に戻りぬ。それより一歳に一度は、必ず斯くして詣づる事、十一歳になりぬ。げにや、十一年の春秋、花は十度も移り、紅葉は十度も散りぬ。されど、くに子の孝情は、年月にうつらず、風雨にくだけず、十歳の長きも、一歳のごと變らず、必ず詣でける、孝女が一心、世に數ありともおぼえず。瀬戸崎の浦には、八坂神社といふ社ありて、くに子が母と共に西念寺に詣で行く頃、毎時必ず祭禮にて、一年に一度のはれの遊びとて、土地の賑ひ、さかりなりしかば、其後、父の彌十郎をすゝめて、年毎に、いろ〳〵の祭事の品物をもち行きて、瀬戸崎にて商はしめ、さて其處より、くに子は、花を競ひ錦を爭ふ老若の群がる中を、唯一人、粗たへの衣の、袖短きを着、母をしかと背おひ、幼き妹をいたはり伴れて、西念寺に詣づる事をならひとしける、げにや、めでたく尊く美しき孝女の心、世のつねの凡俗の人の、え知るべきにあらねど、くに子のやつれたるを見送りて、あなきたなやと袖をはらふあり、あるは若き女の嫗をおへるを見かへりて、こはをかしやとどつと笑ふもありけり。されど、かばかりの孝女かばかりのくに子、

悲しきものは父母の悲しみ、よろこばしき事は父母のよろこび、願ふ所は父母のねがは、待つものは父母のよろこび。それならで、願ふものも待つ所もなき身の、あだし世の人の、そしるも、あざけるも、のゝしるも、耳にえきかず、目にえ入らず、行きて母と共に佛事を營み、歸りは父をも勞りつゝ、うちつれて戻りしといふ。やさしといはむか、けなげとたゝへむか、いふ方も記るす筆も、たえて、雨江の力の、え及ばざるぞうらみなる。

其の後、安政五年ばかり、父なる彌十郎、ふと病の床にひきこもりたるが、くに子といふ孝女の、千重八千重あつき襖も、遂にさゝへず、無情の風いつしかふきすさびゆき、あはれや軒の老木、むなしく落葉のあはれをとゞめてかへらず。げにや、くに子といふ孝女の赤心、萬丈の大山も唯ならず、千引のいはほもものならぬ孝養ありながら　無常の流水、いつしかみなぎりて、あはれや父彌十郎、東流のあへなく逝きてかへらず。風樹のかなしく、流水のはかなきは、有情の人誰かはしからずやは。ましてや、赤心孝情、特更に深きくに子の、何かは恢へむ。なげきの雲なみだの雨、ことはり知らざりしこそ、なか〳〵にことはりなりしか。

それより、くに子、刻苦勉勵、晝は終日いそしみ、夜は終宵いねず、若き女子のかよわき力もて、病める母をいたはり、幼き妹をいつくしみて怠らず、又、亡父の忌日をとふらひ佛事を營みて忘れず。されど、牀邊に寡孤をなくの哀辭はあるも、衣食を叫ぶの悲嘆をきかず。墓頭に酒饌の供事は無きも、蘋蘩の手向けを絶せず。誠に孝養の道、友愛の情、あます所なかりけり。藩主もきこしめされて、米一俵を賞せられたりといふ。世の中の人は、父母に美衣美食をあかしめ、喪事に花香をかざり、墳墓に金玉をきざめど、至孝の道をつくせる如くいふが、今様の常にしあれど、あはれ若き令孃よ姫上よ、父母の望む所は、衣食の美にあらず、喪事の盛にあらず、墳墓の大にあらず、唯、父母の願ふ所は、此のくに子の丹心にあり。此のくに子の孝養友愛にあり。孝も友も心事なり。物質のものにあらず。

萬延の元年ばかり、媒する人ありて、夫を迎へたるも、病母の心に合はざりければ、やがてわかれ〳〵となりたるが、又異夫を迎へざりしこそあはれなりしか、彼元治の元め、赤間關に攘夷の軍起るや、くに子は、思ふやう、國のため君のためには、水火の中をもいとはぬが、祖先の敎なり、大和島根のならひなり。よしや女子なりとて、

國家の大事、よそに見る時かはと思ひ立ちて、けなげにも軍兵の陣に至り、兵粮炊爨の群れに入り、水をくみ薪をはこび、米を炊ぎ飯をくむり、かい〳〵しく立ち働きたりといふ。さかんなりけるかな孝女の心。いさましかりしかな孝女の振舞。

明治の大御代となりて、八年といふ年は、くに子、はや四十三歳、身骨は昔の強きに似ざれど、なか〳〵に孝情は、いやましにかたく、岩國の西福寺、萩の明圓寺など、寺々に說敎ありときけど、必ず病母を背おひて詣づるのみならず、說敎のつゝかむほどは、一日も怠らざりしといふ。殊勝なりけるかな、くに子の孝養。優なりけるかな、くに子の丹心。

これや、誠に實も花も淸くうつくしき水穗の國の女子。これや、誠に心も道もあかく正しき日出る國の女子。斯るをや、千里ゝくま萬代のきは、やまと島根の女子の鑑とせずは、又他に何かあらむ。

安藤藤子

小澤嘉乃

嘉乃は、山梨縣東山梨郡諏訪村の人、岡武敬の長女なり。萬延元年五月廿七日を以

て生る、明治十一年五月、同郡勝沼村、小澤順時に嫁し、長女操を擧ぐ。順時は幼少にして慈母を失ひ、父後妻を娶りて、更に數人の男女子を擧げたり。然るに、順時と繼母との間睦ましからず、家政上、其の他意思常に投合せず、父も亦繼母の愛に溺れて、順時の言を用ゐざるより、順時不快の念に堪へず、悒々の心、終に發して放蕩遊逸となり、花柳の巷に遊びて豪奢を極むるに至れり。嘉乃は、夫の放蕩を深く憂ひ、百方之を諫止すといへども、更に改悛の狀なきのみか、果は之をいぶせく思ひ、罪なき妻を生家に預け、放蕩日頃に十倍す。然れども、嘉乃は如何にもして、夫の品行を矯正せんと、日夜之を念頭にかけて止まず。然るに、天道この無情なる順時をにくみてか、明治十八年六月瘋癲となり、山梨縣病院に入院せり。之をきける嘉乃の驚き一方ならず。父に向ひ、夫の傍に侍し看護せむ事を請へども、父、武敬は順時か從來の行跡より考ふる時は、かれ假令全快するとも、改悛の見込なしと思ひ、順時の心底決して賴むべからざるを說き聞かせ、嘉乃の請を許さず。嘉乃は、心中既に覺悟せし事とて默止せず、尙親戚等に謀り父に哀願して已まず。武敬も其の志の遂に奪ふべからざるを悟り、わづかに之を許せり。嘉乃は、更に人を舅姑に

馳せて、看病の事を請ひ、亦其の許諾を得たり。嘉乃の歓喜譬ふるに物なく、倉皇病院に至り、夫の病床に侍し、晝夜看護に手を盡せしに、其の貞節いかでか通せざらん、須時の病勢は漸次輕快に趣き、數月を出でずして、退院するに至れり。而して、嘉乃は一旦生家に預けらるゝといへども、もと順時の不心得よりいでし事なれば、順時の歸宅と共に舅姑の家に歸り、舅姑に孝順よ、夫に貞節に、一時琴瑟和調の樂ありしを、未だ幾何ならざるに、順時また酒色に耽溺し、金錢を浪費す。嘉乃は、心痛に堪へず、或は之を諷し、或は之を諫め、百方改悛を促すといへども、馬耳東風と聞流し、寸毫も其の効なし、斯くて、又數月を經過せしに、瘋癲病再發し、醫療に、藥石に、介保到らざるなしといへども、啻に其の効なきのみならず、病勢愈募り、夜中突然自宅に放火し、或は得物を弄して他人を傷くる等、到底家人の力を以て、之を看護する能はざるに至り、止むことを得ず、邸内に一室を作り、順時を鎖錮するに至れり。此間嘉乃の心痛苦慮は幾何なりしならむ。吾人は今之を筆にするも、尚其の萬分の一を示すに過ぎざるを知るなり。斯くて、又夫を看護するの任、嘉乃の一身に在り。心を苦しめ、思を潜め、造次顛沛にも、療養を怠らず、且

夫を鎖錮せる一室と本宅とは少しく隔離せるにぞ、十分なる看護をなすに於いて、自ら不便を覺ゆるとて、夫の居所に接近せる物置の傍に居所をつくろい、長女操と共に爰に起臥し、夫の看護に等閑ならざるのみか、舅は此の頃、營業上の失敗を來し、家政頗困難に陥りしを察し、夫の治療はいふまでもなく、親子二人の生活に至るまで、自身手一つに引受け、他人に請ふて、其の衣類等を洗濯し、僅の賃錢を得て之に充て、又夫は瘋癲なるより、嘉乃の苦心を辨へず、種々の食物を求めて飽く事なきをも、嘉乃は敢て辭せず、其の欲するまゝに之を與へ、且操を小學校に通學さする費途に至る迄、自支辨せざるを得ざるを以て、手細き女の稼にては、迚も收支償ふべきに非ず。されど、曾て婚嫁の時、携帶し來れる衣類調度を買却して、遺物なきに至るといへども、少しも怠色なく、益、夫の療養に心を委ぬること、玆に八年の久しきに及べり。官、其の貞節を好し、賞を行ふ。其の狀に曰はく、

賞狀

東山梨郡勝沼村　小澤かの

資性順良、平素舅姑に孝、夫に順、明治十八年六月、夫、順時瘋癲病に罹り、爾

後専心一意能く療養を盡し、曾て倦怠の色なし、兼て一身を以て家計を經紀し、其の貧困なるにも拘らず、長女操を教育する事八年の久しき一日の如く、克く貞節を盡す段、洵に奇特とす。仍て其の賞として、金五圓下賜す

明治二十五年十月五日

山梨縣知事従三位勳二等　中島錫胤印

嗚呼、此の貞婦、夫と舅姑と不和なる中に立ち、夫の無情を恨みず、貧困に屈せず纎手を揮ひて自給し、全快の目的なき病者に侍して、療養看護到らざるなし。世の輕薄無節の婦女をして、之を聞かしめた、其の感果して如何ぞや。實に得難き貞婦あるかな、實に得がたきの貞婦なる哉。

藤原伊佐媛

こと葉はこゝろのこゑなり、つゝしみて
ひとたびものいふとも、こゝのつのかな
へのおもきがごとくすべし

(唐錦)

家政

看護法捷徑（四十一）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方（つゞき）

（七）赤痢

一 赤痢は、多く夏秋の候に、流行する傳染病にして、一種の病毒、皮膚、特に腸に感染するに依りて興る、通常之を痢病と稱ふ。夏秋の候、氣候の變換定り無き時に於て、身體を濕潤し、或は寒冒し、若くは未熟の果物、其他消化し難きものを多食して、胃腸を害する等に依りて、誘起する事多し。

二 赤痢に罹る時は、先身體違和を覺へて、熱發し、數回下利し、特に通利前に、不快の腹痛を發し、腹部を按すれバ、其痛増加す、最初は、稀薄の水便を下すも、次第に粘き汁と爲りて、中に血液を混じ、後に純血を下すものも有。下利の度數増すに從て、便の量は益減少し、後には、僅かに一匙にも足らざるに至るも、便意は益頻數と爲る。

三　赤痢に罹りたる疑ある時は、速に患者を他人と別居して、安靜に平臥せしめ、輕く温き布、例之ば、「フラチル」等にて、腹部を纏ひて温保し、兼て、粘滑の飲料、例之ば、葛湯、山慈姑煎、の如きものを與へて、發汗せしむべし。決して、冷き飲料を與ふべからず、又速に醫の來診を乞ふべし。

四　赤痢患者の上りたる厠は、嚴に他の健康人、若くバ他の患者の用るものと別つべし。便器を用ゐしものは、排泄する毎に、石炭酸水をそゝぎて、一々十分消毒法を行て後に、數回分を一度に燒却するか、若くは深く土中に埋むべし。便器、及溺器、は用を終る毎に、石炭酸水をそゝぎて、消毒すべし。又假令消毒後と雖、直に之を他人に便用すべからず、總て本病の傳染毒素は、重に大便中にあるものなれば、便、及便器の取扱方、最も注意を要す。

五　其外總て排泄物、被服、器具、家屋、室内、等の消毒方は、腸窒扶斯に同じ。快復時の注意方も、亦然り。

（八）　虎列羅

一　虎列羅は、傳染の性劇しく、極めて危險なる病にして、之に罹る時は、卒然劇し

き下利を來して、其量非常に多く、最初は、糞汁の觀われども、次には、米泔汁樣のものを下し、少しも臭氣無し、一回、若くは數回、下利の後は、速に顏貌憔悴、眼球陷沒して、顏汚青色と爲り、聲音嗄嘶し、全身の皮膚冷却して、脈搏殆ど指頭に觸るゝ事能はず、（鼻尖、及舌尖、特に寒冷と爲る、）又試に、頸、若くは手背等の、皮膚を撮みて、皺襞を生せしめて、指を放つに、皮膚の彈力を失て、皺襞猶消褪せず、身體甚しく疲倦して、多くは起立する事能はず、煩悶呻吟して、特に心窩の苦悶を訴へ、下利に伴ふて、最初は、食物を吐出するも、後には、臭氣なき米泔汁樣の液を吐出し、（多くは吐、瀉、を兼發するを常とすれども、稀れには嘔吐なきもの有）小便甚しく減少し、或は全く閉尿す、重症に在ては、身體次第に寒冷と爲り、腓腸に、痙攣を興し、數時間を不出して死に歸す、輕症のもの、若くバ經過幸なるものは、下利止み、皮膚の溫度、次第に復し來る。

漫録

あうむ文學（九）

楢の舎主人

俊頼卿の見識（つゞき）

卿また、題詠の注意を説きて、大かた歌よむには、題をよく心得はべるべきなり。おほよそ、題の文字は、三字四字五字ある題もあるを必よむべき文字、必よむべからざる文字、まはして心をよむべき文字、さゝへてよむべき文字あるを、よく心得べきなり。心をまはしてよむべき文字を、あらはによみたるもわろし、唯あらはによむべき文字を、まはしてよみたるも、くだけてかろく聞ゆとぞ、ふるき人申しける。かやうのことは、ならび傳ふべきにあらず。たゞ、わが心得てよむべきなり。

これらの趣を見るに、題に必よむべき文字といふは、天象、地儀、居所、植物、動物、雜物、などをは、題のまゝによむべきにや。關をよまんには、必、その名をさしてよめとこそ、先達は申されしか。誠にたゞの野山こそあれ。その關とあらはさでは、荒涼なるべし。又、櫻といふ題に、花とよめる、とがなし。必よむべからざる文字とは、たとへば、野外河邊などやうなる題に、外邊、また寄題に、寄字、述懷の述字、これらは、さすがに人よむことなければ、ゑるすにも及ばぬことなるべし。まはして心をよむべき文字とは、すべて詞

の字なし。假令、鶯聲稀など申さん題に、さゝへてまれなりなどは、よむべからざるにや。念なかるべし。鳴く日すくなしとも、久しくきかざりつるに、今なくこそめづらしけれなどやうに、よむべきやらん。又、まれなることをよめらん、ふるき歌を本文として、その心をとりてよみたらん、いといみしかるべし。又、年にまれなるなどいふふるき詞をとりたらんは、さゝへたりとも、これはふるくよみきたれることばにて、とかとも、聞えざるべし。たゞ題よすがりて、鳴く鶯の聲そまれなるなどやうに、よむまじきにや。郭公幽などいはん題に、かすかなりとよめらん、本意なかるべし。ほのかに聞ゆる、などやうのことゞを求めて、雲井はるかに過ぎぬるかとも、をちの里には、さだかにこそきくらめなどいふ心地を、よくおもひつゞくべきにや。月前述懐など申さん題に、とほき心のとよみたらん、あるべきことにもあらず。たとへば、月をみれど、更科姥捨山も、こゝろにうかび、もろこしのからくにまでも、へだてず思ひやらるゝさまを、よむべきにこそ。深雪といふ題を得て、ふかしとよめらん、心うかるべし。ふみわけがたしとも、いくへつもるらんとも、ふかきことにたとへて、よそへて詠みたらん、いとおかしかるべし。すべて、戀、述懐の題に、かやうのことおほかるべし。これになずらへて去るさて、これは、必よむべからざる文字におなしけれども、かれはすべて心をもまはさぬことなれば、各別に去るせるなり。又必よむべき文字といふ

は、さゝへてよむべき文字といふにこそは、おなじかるらめ。おのづから、題によりて、おもひわくべき文字もや侍らん。又、春夏秋冬とあるらん題を得ては、字のまゝによみても侍るべし。そのときの景物をとりてもよむべし。先達みなかよはしてよめり。すべて題を得てよまんには、題の外のことをよみまじふべからず。その題のことわりを、三十一字によみつべし。但、題によりて、よみくしたるも、くるしからずきこゆることあり。よくおもひはからふべきことになん。立春といはん題に、霞たつ、雪ふる、氷とくなとていのことは、みな春のはじめの景氣にて、題に、霞たつ、雪ふる、氷とくなどていのことは、みな春のはじめの景氣にて、題のほかのものとも見えぬなり。百首歌などよむに、かたはらの題に、霞のあらんには、立春早春の歌には、かすみならぬ風情をめぐらさんとおもふべし。これにて、いづれの題も、みなおしはかられぬべきことになん侍べれば、かず〳〵にのせず侍り。むすび題をぞ、一句にはこめよむべからず。又、上句にもよみつくすべからずとぞ、先賢のいましめは侍りける、といへる誠によくいはれたり。

卿また語りていはく、白河院、淀のわたりに御方違の行幸あり、女房殿上人など皆船に乗り、終宵寢ねず。曉に及びて、郭公一聲なき過ぐ。御船の女房窃に、「よどのわたりのまだ夜ふかきに」、と唱へ出でたる、時に臨みてめでたかりしものなり。人々感歎して、今に忘れ難しと。この郭公の歌は、

天暦の御時、御屏風に、淀のわたりする所に、と有りて「いづかたになきて行くらんほとゝぎすよどのわたりのまだよふかきに」と壬生忠見がよみし歌にて、拾遺集にも載せたり。卿は、殊更に想を枉げ情を矯めて、歌を作ることを好まず。悲しむべきに悲しみ、喜ぶべきに喜び、自然に觸れて、天眞を漏らし、毫も假飾を施さず。或人、花かつみの歌をよみて、卿に示す。卿いはく、如何なるものぞ。その人いはく、よくも知らぬを知り顔によみぬと。卿即、「鴨のゐる玉江におふる花かつみかつよみながら知らぬなりけり」と腦裡に印し、しかも口に出さず。以て卿が意の實詠にあるを知るべし。嗚呼世間歌を弄ぶもの、漫に卅一字を連ねて、風雅を學び、歌人を装ふもの、まさに恥づるところ無からんや。いなおほせ鳥、呼子鳥の類は、古今集以來、歌人の疑義として、種々の解釋を加ふるところなるに、今の世に、さる鳥ありやなしやを詳にせず、見もせず聞きもせざることを、まゝ歌によむ輩、及び、死語をつらねて歌とおもへる者、まさに愧死せざらんやは。

卿もと、連歌を好まず。おもへらく、歌體に害ありと。然るに金葉集を撰ぶに當りては、多くこれを載す。これ蓋、人の美をすてざるによる。當時、元成法印連歌つくることに得たり。ある日、好士等來り集りて、その池の釣殿に遊ぶ。卿の子俊重、

つり殿のしたにはいをやすまざらん

といひかく。元清頻に案ずれども、遂に附くるこ

と能はず。俊重歸りて卿に語れど、
うつばりのかげ底にみえつゝ
と附けたり。月明なる夜、宇治の網代にて、治部太輔雅光が、
月はひるひをばよるとも見ゆるかな
といひかけたれど、附くる人もあらざりきと聞きて、
いつかわしろにはえなかるべき
と附けたり。
卿かつて曰く、和歌を判ずる者は、十德を備ふるものならざるべからずと。その中、特に德望明辨強記の類は、判者たるものゝ具備せずばあるべからざるところ。卿が朝庭及び諸家の歌合に推されて判者となる、誠にその價値あればなり。左京大夫顯輔が、「あふとみてうつゝのかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける」を、これはむくのはみがきして、はなあぶらひける歌なり。よのつねの人ならば、「うつゝのかひはなけれどもはかなき夢ぞうれしかりける」とよましゝ。誰かはかくよまんと感歎せられたり。卿が辨明はいかに。強氣はいかに。今詳に知ること能はずと雖も、幸にして歌合判詞の傳はれるものあり。又以て卿の見識を窺ふ材料とするに足らん。但こゝには卿の難陳にかゝるをのみ擧げんとす。
基俊朝臣が時雨の歌、「おもさねて枯れゆくをのゝ岡べなるならの朽葉にしくれふるなり」を批判して、岡べなるすべらかにくだらず。奈良の朽葉もいかゞ。朽ちなば音ずれずもやあらん。あながち

の事かといひ、戀の歌の「かつ見れどなほぞこひしきわぎもこがゆづのつまぐしいかでさゝまし」をゆづのつまくしとは、素佐烏尊の、稻田姫に逢ひ初給ひし時、みづらにさし給ひし櫛なり。この歌は、かつ見れどとよまれたれど、すでに逢ひにける心なんみゆる。末の句に、いかでさゝましとあれば、まださゝぬとこそ見ゆれ。本文にはたかひたるやうにみゆといひ、俊隆朝臣が「よとゝもにもえこそわたれわがこひはふじの高根のけぶりならねど」を、ことの外にふるめかしといひ、顯國朝臣が、時雨の「ぬるれども嬉しくもあるかもみち葉の色ますらめの雫とおもへば」を、げに紅葉の下にたちて、その雫にぬれてこそ、嬉しくもよむべけれ。只おほかたの時雨にぬれて、これは木葉をそむる時雨なれば、うれしとて立ちものかざらん、あぢきなくぞ聞ゆるといひ、法性寺殿が殘菊の「白ぎくもうつろひにけりうき人の心ぞかりとなにおもひけん」を、人に忘られたるひとの、恨みたるに常によむふしなり。戀の歌とぞいふべき。菊の歌と見えずと批評せり。又みづからの「おぼつかないかに老ぐるゝ空なれぞうらこの山のかたみなせなり」を、かたみなせなりとそへたる詞、おぼつかなし。若、この山に、さもよむべきことのあるにか。只うらこの山といふにつきていはゞ、歌詞とも覺えぬかな。人々も申されんといへるは、「かつよみながら知らぬなりけり」、の尤に傚へるにあらずや。自だに非難ある歌を、大切の晴の席に出して、勝を制せんとするは、何た

る粗忽ぞ。名も知れぬ普通の人ならむいざ。苟、宗師を以て許されたる俊頼卿にして、かゝる失體をなすに至りては、決して默々に附すべからず。自ら信ずること薄うして、人を服せんとする、嗚呼また難いかな。卿又古歌の様體を批評して、左の如くいへり。

ひとへに優なるうた、

思ひいづるときはの山の岩つゝじ
　いはねは社あれこひしき物を

春たちてあしたの原をゆきみれバ
　またふるとしの心地こそすれ

けだかくおもしろきうた、

よそにのみ見てややみなん葛城の
　たかまの山のみねのしらくも

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の
　かは風さむみちどりなくなり

よきふしに、優なるこゝろ具したるうた、

住よしのきしとせさらんもの故に
　ねたくや人にまつといはれん

むねはふし袖は清見がせきなれや
　けふりも浪もたゝぬ日はなし

意をさきとして詞をよめるうた、

吹く風にあつらへつくる物ならバ
　この一本はよきよといはまし

春かせは花のあたりをよきてふけ
　こゝろづからや移らふと見ん

よき歌に、こはき詞あるうた、

はる霞たてるやいづこみよしのゝ

よしの丶山にゆきはふりつ丶
野邊近く家ゐしをれバうくひすの
　なくなるこゑは朝な／＼きく
風情あまりすきたるやうなるうた、
大そらにおほふむかりの袖もがな
　ちりかふはなを風にまかせし
みつうみに秋の山邊をうつしては
　はたはり廣きにしきとや見ん
春雨のふるはなみだかさくらはな
　ちるをゝしまぬ人しなけれど
五文字こはきうた、
そへにけふくれさらんやはと思へ共
　たえぬは人のこゝろなりけり
末ながらかならぬうた、

さくら花ちりかひくもれ老らくの
　來んといふなる道まどふかに
夢路には足もやすめずかよへども
　うつゝに一目みし事はあらず
黒かみに白かみましりおふるまで
　かゝる戀にはいまだあはざる
聞くに、耶ふかくきこゆるうた、
この世にて君をみるめの難からバ
　來んよのあまと成てかつかん
わすれらぬ命なりとも契りおかん
　此世ならてのみあらしと思へは

（つゞく）

あらずもかな（第七）

鹽井雨江

（十五）家婢奴僕などを、牛馬の如く思ひてか、鞭もてたゝかぬばかりに、むごく召使ふ婦人令嬢こそ、人間の世の中には、あらずもがなれ。

牛や馬や、さるいやしき獸類を扱ふも、心ある人は、猥りに鞭もて、せむるといふ事せず、たゝくといふ事せず、むごく情なく、追ひつかふといふ事、決してせぬものなり。

ましてや人間、家婢といふも、奴僕といふも、天の下、地の上、おなじ宇宙の間に、有形の殼無形の靈、おなじ人間の類に生れたる者。宇宙より見、類よりいはゞ、皆同境同種の者、誰か禽獸ならむ、誰か牛馬ならむ、皆人類なり。

さるを、おなじ人類のものを、いやしき牛馬のやう取り扱ひ、下等の禽獸のやう用ひたらむは、やがて、おのれ自らをも、牛馬と思ひ、禽獸と心得たる者なり。やがて、世に高き人間の品位を、下等の禽獸に賣りたる者なり。やがて、人間の品格を破らむと爲る反賊なり。さらむ者は、牛馬よりもいやしく、禽獸よりも劣れりといふべきのみ。

人の世の中は、高きは低きをあはれみ、上なるは下なるをいとほしみ、強きは弱きを助くるといふが、やさしき人の道、情ある人の行ひなり。ましてや女子。あくまでやさしく情あるを本分とせる女子、家婢召仕ひなどは、必ず柔和しく心を懸けて、召しつかひたらむが、女子の本分なり。

殊に年わかき婢などには、一入やさしう心を添へ

やるべきもの。さるを、金石もこげ、水すら涸るといふ夏の日の炎熱をも厭ひやらず　草木もまはれ、禽獸も凍るばかりなる冬の日の寒さも、更に搆ひもやらず、水火の業に少女を追ひつかひ、あるは、面のやつるゝをも知らず、袖のあせるをも知らず、知りたるも、知らぬさましして、少き家婢を、雨風の辛きにまかして顧みず。露ばかりの過失にも、玉を碎きたるばかりに怒り狂ひ、そよとの事ぐさにも、山の嵐のすさまじげに猛り罵婦人はた令孃は、あらずもがなの限りなり。女子といふ際にはいふも更、人間といふ社界にも、ね置かぬ者。はや〳〵、山谷に捨てゝ虎狼の妻とせむ。蒼海の底に沈めて、鰐魚の女と爲さまほしや。

よしや家婢にしあれもとて、夏の暑さには、つとめて皮膚のこげぬやう、冬の寒さには、さすがに手足の凍へぬやう、露のあはれをかけやり、雨あらくば風つらくも、袖のつゝれぬやう、面のやつれぬやう、心を添へやり、快からぬ事あらむ、怒らで事を諭し、過失しなむ、罵らで道を敎へやらむこそ、誠に女子の柔和かるべき本分にも叶ひ、若き家婢を召しつかふ道をも得たるなれ。

（十六）女子の僅に十一二歲、世の濁流、いまだ露ばかりくまず、世の風塵、なほ、そよとばかりも呼吸せず、人の生涯中、色も無く心も無く、佛の如く神の如く、清淨無垢の、世に對き年齡の少女よ、汚く、みだりがはしく、耳ある者の聞くをえ忍びぬ、あさましき樂歌を敎へ、目ある者の見る

に之堪へぬ卑しき舞曲を習はしめ、淫風亂聲の殷なる演劇場裡に徘徊せしむるといふ事は、やがて、潔白の赤心を、好みて濁流に誘ひ、清淨無垢の玉體を、求めて塵埃の中に捨つるが如きものあらずもかなの、上も無く、くちをしく、あさましきものなり。さるもの好む父母は鬼。それ教ふる人は怪物。それ習ふ女子はあはれむべき者。
女子に歌舞を教へむと思はゞ、清音美聲、優にけだかく、恥かしからぬ風姿のものを擇びて、歌はしめ舞はしむべし。清く美しくけだかくありてこそ、歌舞は人の心を柔和しうあはれにするものなれ、優美に爲すものなれ。やがて、優美をむねとすべき少女の習ふものなれ。

日本文學の女傑（三）上

山崎庚午

俳諧の字は隋書に出づ、けだし、滑稽の意なり。されど、我國にても、ざれたる歌を稱して、古代より、俳諧と呼び來りき、古今集には、既に、この名目あり、後世に至りては、十七文字の句に、俳諧といふ名稱を下す、然れども、これ、廣き意に過ぐるものにて、實は、俳句と稱せんかた、適當なるべし。
俳句の起源は連歌に出づ、連歌は　景行帝の朝、日本武尊と秉火の翁との詠に始まり、それよりのちの書には、此體の歌、しば〳〵見えたり。又、物語などにもしるされたれど、連歌といふ名目は、金葉集に於て、始めて現はれたり、其前には、此

名目はなく、たゞ、歌のみ存せしなり。後鳥羽天皇の頃に至りて、斯道、盛に行はれ、當時、このわざに有名なる人々、帝には、土御門院、順徳院おはし、臣下には、爲氏、良實、實經、辨内侍、基家、家良、知家、行家、爲世、爲相、爲藤、等ありけり。この後、文和の頃に至りて、二條良基といふ人、連歌に巧みにて、連歌師、救濟とゝもに、莵玖波集を撰む。當時、善阿法師の、斯道に達せるあり。其門弟に、救濟、順覺、信照、良阿、十佛、等あり、救濟の門弟には、周阿、等ありけり。應安二年に、良基公、救濟等と議して、連歌の法式、はじめて定まる。この後、梵燈菴主、宗砌法師、心敬法師など、うちつゞきて出で、また、少しおくれて、宗祇、宗長、肖柏、紹巴、貞德、等の、斯道に秀でたるありけり。

俳句は、もと、俳諧體の連歌より、出で來れり。されば、連歌、盛なりし頃は、既に、俳句の形をなせるものあり。彼の連歌の發句は、自から、其基を開けり。宗祇、宗長、等の頃には、既に、俳句にして、全き體裁を具へたるものあり。それより、宗長、肖柏を經て、のち、宗鑑守武等の改良により、俳句の基礎、やうやく固まれり。これより、少しおくれて、季吟、重頼、貞室、等、出でて、益す、この道を開きしかバ、其弟子中より、偉人を出すこと、多く、西山宗因は、重頼の門に出で、談林の一風を立て、鬼貫は、重頼、宗因に學びて、伊丹風を開き、遂に、大偉人、芭蕉翁は、季吟に學びて、正風をひらく。芭蕉は、卓世の才

と、非凡の學とを具へて、俳門の祖師となり、老莊の風味を觀じ、和學の優美を交へ、大に俳諧の道を進む。其門に、十哲あり、みな、稀に見るの才質なりければ、これより、俳句大に起れり。連歌よても、俳句にても、女流の名をあらはせる者、いと多かり。然れども、連歌に就きては、世の傳ふるところ少なし。俳句の女流は、男子をも凌げり。而して、これ等の女流は、みな、才に富み、學に長じたるは、驚くべきほどにて、まづ、左に掲ぐる、園女の傳を見て、其一般を知り給へ。

園女

俳句に妙名を得たる女子は、美津女、捨子、園女、梢風尼、智月尼、千代女等にして、其うち、最、すぐれたりと思ふは、園女と、千代女なるべし。千代女のことは、女鑑、六十四號に、雨江君のものされたるのちなれバ、余がいふべくもあらず。さて、園女は、伊勢國松坂の人なり、歌及び俳句を能くし、且つ、書に巧みなり。俳句をも、美津女につきて學びしといふ。美津女は、伊勢、山田の人、杉木光貞が妻にて、斯道の妙手なり。

鳴くにさへ笑はゞ如何にほとゝぎす

右ひだりしれぬわらびのてさきかな

などの妙句あり。芭蕉翁、行脚して、伊勢に來りける時、園女、これを饗應す、そのとき、翁、園女を譽めて口ずさみけるは、

しら菊や目に立て見る塵もなし

園女つぎてよみけるやう、

もみぢに水を流すあさつき。

園女は、そのゝち、惟中の妻となりしが、夫、死してのち、東武にくだり、蕉翁の門に入る。蕉翁、死してのちは、其角の弟子となり、日夜、俳句に身を委ね、終始、節操を守りしといふ。詠句のうち、すぐれたるは、

　夜わらしや太閤様のさくらがり、
　手をのべて折ゆく春の草木かな、
　負た子に髪なぶらるゝ暑さかな、
　有程の伊達しつくして紙子かな、

等なるべし。みな、婉麗の姿體、一誦して、その味、ながく、忘るべからず。されど、この女の性質は、磊落宏放、にして、間々、男子をしのぐ、彼の雲虎和尚と、佛道を論じたる書の如き、もつて、その一般を見るべし。

來書の趣拜見候不求眞不求忘は大道の根源誰も存する所憚ながら珍からず候一心源頭に上ての所作柳は綠り花は紅唯その儘にして常に句をいひ歌を綴て遊申候事に候無益の口業なら一切經も無益の口業にて候法臭き事は嫌にて我平日の行は念佛と句と歌となり極樂へ行くはよし地獄へ落つるは目出たし和二玉韻一自巳念其不覺一心。淸燈巳燿一燈心。市中默々有二明鏡一全識人間淸淨心。

　誰か見ん誰か知べき有にあらず
　　無にもあらぬ法のともし火

嗚呼、才識の高き、此女の如き、古今いく人かある。

或は曰く、狂歌は上世の鄙曲の歌なりと、又、曰く、狂歌は、俳諧歌とひとしと。これ等の二説は、共に、正しからざるべし。鄙曲の歌 俳諧體の歌、ともに、狂歌と異なれり。鄙曲の歌は、自から、一種特別のものにして、俳諧體の歌は、狂歌の類なるべきも、後者は、前者より一層の俗調を帶びたり。

狂歌の起源は、中世なるべし、彼の保元平治物語などに、藤六左近が詠めりとしるせる「將門は米かみよりぞいられける俵當太のはかりごとにて」の歌など、その始なるべし。それよりのちの軍記に、落首とてしるせるは、みな、此體の歌なり。當時、この體の歌、京童のさがなき口より、出でたりとのみおもふべからず。次九條の大相國などか、詠じ給ひしを、愚管抄に、記るされたり。鎌倉時代に至りては、この體の歌、やゝ發達せる如し、當時、曉月坊といふ人あり、歌人、藤原定家卿の孫にして、爲家卿と阿佛尼、(そのころ安嘉門院四條といふ)との間の子なりと傳ふ。頗る、奇才ありしも、性、卑體の歌を好みて、人をして、數々、驚笑せしめぬ。此人の歌、あまりに卑俗なるを、或人の笑ひしかば、

曉月に毛のむく〳〵と生へよかし
さる歌よみと人にいはれん、

と詠じて、其人を驚かしめたりといふ。嘉暦三年十一月八日死す、辭世あり、

むそじあまり四歳の冬の長き夜に
うきみの夢を見はてぬるかな

足利時代にも、この體の歌、見ゆ。ことに、戰國時代より、徳川時代に入りては、學者、文人と稱せらるゝ人にして、この體の歌を詠せしもの少なからず。いま、こゝに、當時の書中に見えし狂歌を輯取して、參考に供す。

親鸞上人

少々のことをも耳にきゝいれず
たゞ一向にみだをたのめよ

一休上人

なにをがなまゐらせ度は思へども
達磨宗には一物もなし。

雄長老

いつはりのある世なりけり神無月
びんぼう神は身をもはなれず

貞徳

紫のふどしに似たりふぢの花
松のふくりを咲てつゝめむ

芭蕉翁

などてかくいそがしいとて二階より
おちてのゝちはひまになりけり

一位大納言

有難き昨夜の奉書ひらくより
けふの日和を松茸のかさ

風早三位

きこしめす御膳の酒も泉河
此下かもを御肴にして

桑原前中納言

たべよひて我のみ色にいづみ川

たゞすかはなる森のあをさき

この終りの三歌は、靈元帝の御幸ありし折、三卿が、詠じ給へるところにて、貴顯中、すでにこの詠あるは、斯道、發達の一証なり、これよりのち、未得、卜養、橘洲、狂歌堂、木阿彌、蜀山人、雅望、等、相次で出で、頗る、この道の隆盛を來せり。

智惠内子

智惠内子とは、狂名にして、實は、狂歌堂木阿彌の妻なり、機才ありて、狂歌口とく詠めり、一日、鐵炮洲に住める人、訪ひ來りしに、木阿彌他出して家にあらず、客しはく〳〵と、歸らんとせし時、木阿彌の妻見て、

てつぽう洲おとにきこゑしたまの客
亭主の留守はねらひそれたか

と詠みて、客を笑はせけるといふ、又、内子の家に、信濃より雇へる三六といふもの、國へ歸らんとて、暇を乞ひければ、

そろだんのたま〳〵おきしさぶろくが
くにへかへるはにくの十八

と戯詠しけり。か丶る才女なれバ、其狂名もいと高く、當時、女子にて、この流をくむもの、頗る、多かれど、こ丶にはもらしつ。さて、又、狂歌堂、木阿彌は、本名を金子喜三郎正雄といひ、武藏松山の人なり。狂歌に妙を得て、一時、その名、高く、また手爾乎波に委しくして、詞の本末一卷を著はす。この人、ある時、山櫻をよめる歌に、

山櫻さけど白雲ちれバ雪
花見てくらす春ぞすくなき

また黒木賣のかたかける畫賛に、

朝まだき道もたら〳〵くろぎうり

くらきに牛やひきいだすらん

富士かける畫賛に、

富士のねの雲の衣をふきはらひ

すそ野を見するわしたかの山

天明元年、隅田川の邊り、水神森まて、剃髪して、渡邊嵩松と改名せし時、歌を詠みて、

けふよりも衣はそめつ墨田川

ながれわたりに世をわたらむや

といふ、其名、一時に高し。

さて、以上述べ來れる、紫式部、阿佛尼、園女、智惠内子の四人は、各々相ことなれる、文壇の女傑として、其名、後世に高き才女なり。素より、精しく考へ察しなど、四人の間、たがひに、等差と優劣となきを得じ、されど、日本文學四文壇の四女傑として、斯くはものしつ、筆を止む

(完結)

井蛙小錄　　井上頼文

ものうらやみはすまじきことと（宇治拾遺物語所載）

今はむかし、春つかた日うら〳〵かなりけるに、六十斗の女のありけるが、虫うちとりてゐたりけるに、庭に雀のはしりありきけるを、童部、石をとりてうちたれどあたりてこしをうちおられにけり。羽をふためかしてまどふほどに、烏のかけりありきければ、あな心う、からす、取てんとて、此女いそぎてとりて、いきまかけなどして物くは

す。小桶に入てよるはおさむ 明れどこめくはせ、銅薬にこそぎてくはせなどすれバ、子ども孫などあはれ女とじは老て雀かはるゝとて、にくみわらふ。かくて、月比よくつゞけはやうゝおどりありく、雀の心にも、かくやしなひいけたるを、いみじくうれしゝと思けり。あからさまに物へいくとても、人に、此雀みよ、物くわせよ、などいひおきけれど、子まごなどあはれなんでう雀かはるゝとて、にくみわらへども、さはれいとをしけれどとて、飼ほどに、飛ほどに成にけり。今は、よも、烏にとられじとて、外にいでゝ手にすへて、飛やするみんとて、さゝげたれバ、ふらゝととびていぬ。女おほくの月比日比、くるれどをさめ、明れどものくはせならひて、あはれや飛ていぬるよ、又來やするとみんなど、つれゝに思ていひけれど、人にわらはれけり。さて、廿日どかりありて、此女のゐたるかたに、すゞめのいたくなくこゑしけれバ、すゞめこそいたくなくなれ、ありしすゞめのくるにやあらんと思て、いでゝ見れど、此すゞめなり。あはれにわすれずきたることあはれなれ、といふほどに、女のかほをうちみて、くちより露どかりのものをおとしおくやうにしてとびていぬ。女なにゝかあらん、すゞめのおとしていぬる物はとて、よりてみれバ、ひさごのたねをたゞひとつおとしておきたり。もてきたる様こそあらめとて、とりてもちたり。あないみじ、すゞめの物得て寶に志給とて、子どもわらべは、さはれ植てみんとて、うゑたれバ、秋になるまゝに、

いみじくおほくおいひろごりて、なべての杓にもにず、大におほく成たり。女悦けうじて、さと隣の人にもくはせ、されども〳〵つきもせずおほかり。わらひし子孫も、これをわけくれ食てあり。一里くばりなどしてはてには、まことにすぐれて、大なる七八はひさごにせんと思て、内につりつれておきたり。さて、月比へていまはよく成ぬらんとて見れば、よくなりにけり。とりおろしてくちあけんとするに、すこしおもし、あやしけれども、きりあけてみれば、物ひとはた入たり。なにゝかあるらんとて、うつしてみれば、白米の入たるなり。思ひがけずあさましとおもひて、大なる物にみなをうつしたるに、おなじやうに入てあれば、たゞことにはあらざりけり。すゞめのしたるにてぞと、あさましくうれしけれど、物にいれてかくしおきて、のこりの杓どもをみれば、おなじやうに入てあり。これを、うつし〳〵かへば、せんかたなく多かり。さて、まことにたのもしき人にぞ成にける。となり里の人も、見あさみ、いみじきことにうらやみけり。このとなりにありける女の、子どものいふやう、おなじことなれど、人はかくこそあれ、はかばかしきこともえし出で給はぬなどいはれて、となりの女、この女ばうのもとに來りて、さても〳〵、こはいかなりし事ぞ、すゞめのなどは、ほのきけど、よくは得しらねば、もとありけんまゝに、の給へといへど、ひさごのたねを、一つおとしたりしを植たりしよりある事なりとて、こまかにもいはぬを、なほありのまゝ

に、こまかに、の給へとせつにとへど、こゝろせばくかくすべきことかはと思て、から〳〵、こしをれたるすゞめの有しを、かひ生たりしを、うれしと思けるにや、杓のたねを一つもちてきたりしを、うゑたれどかくなりたるなりといへば、そのたねたゞ一つたべといへど、それに入たるためなどはまいらせん、種はあるべきことにもあらず。さらに、えなんちらすまじ、とてとらせねど、われもいかで、こしをれたらんすゞめ見つけてかはんとおもひて、目をたてゝみれど、こし折たるすずめ、更にみえず。つとめて、ことにうかゞひみれば、せどのかたに、米のちりたるを食とて、すずめのおどりありくを、石をとりて、もしやとてうてど、あまたの中に、たび〳〵うてど、おのづからうちあてられて、得とはぬ有り、悦てよりて、こしよく打をりてのちにとりて、物くはせ、藥くはせなどしておきたり。一か徳をだにこそみれ、ましてあまたならば、いかにたのもしからん、あのとなりの女には、まさりて子どもにはめられんと思て、此内に米まきて、うかゞひゐたれど、雀どもあつまりて食にきたれば、又うち〳〵しければ、三つ打おりぬ。いまはかばかりにてありなんと思て、こし折たるすゞめ、三斗桶にとり入て、銅こそげてくはせなどして、月比けるほどに、みなよく成にたれど、よろこびて、とに取いでたれば、ふら〳〵と、とびてみないぬ。いみじきはざしつと思ふ。すゞめは、こしうちをられて、かく月比こめおきたるを、よにねたしとおもひけり。

さて、十日斗有て、このすゞめどもきたれど、悦てまつ、くちに物やくはへたるとみるに、ひさごのたねを一つづゝみなおとしていぬ。されどよと、うれしくて、とりて三ところに植てけり。れいよりも、する〳〵と生たちて、いみじく大になりたり。これは、いとおほくもならず、七つ八つぞなりたる。女ゑみまけてみて、子どもにいふやう、はか〴〵しき事去いでずといひしかど、我はとなりの女にはまさりなんといへバ、げにさもあらなんとおもひたり。これはかずのすくなけれど、米おほくとらんとて、人にもくはせず、われもくはず。子どもがいふやう、となりの女房は、里となりの人にもくはせ、われもくひなどころせしが、これは、まして三つ種なり、われも人にもくはせらるべきなりといへど、させむと思て、ちかきとなりの人にもくはせ、われも子共もろともに、くはせんとて、おほらかにてくふに、にがきこと物にもにず。きはだなどのやうにて、心ちまどふ。くひとくひたる人〴〵も、子供も、われも、物をつきてまどふほどに、となりの人ども〻、みな心ちをそんじてきあつまりて、こはいかなる物をくはせつるぞ、あなおそろし、露斗けふんの口によりたるものも、ものをつきまどひあひて、しぬべくこそあれと、はらだちて、いひせためんと思て、きたれど、ぬしの女をはじめて、子共も、みな物おぼえず、つきちらしてふせりあひたり。いふがひなくて、ともにかへりぬ。二三日も過ぬれバ、たれ〳〵も、心ちなをりにたり。女おもふやう、み

な米にならんとしける物を、いそぎてくひたれど、かくあやしかりけるなめりと思て、のこりをば、みなつりつけておきたり。さて、月ごろへていまはよくなりぬらんとて、うつしいれんれうの桶ども、ぐして、へやに入る。うれしけれど、はもなきくちして、耳のもとまでひとりゑみして、桶をよせて、うつしければ、あぶ・はち、むかで、とかげ、くちなはなどいでゝ、目、はなともいはず、ひと身にとりつきて、させども、女いたさもおぼえず、たゞこめのこぼれかゝるぞと思て、しばしまち給へすゞめよ、すこしづゝとらんといふ、七八のひさごよりそこらの毒虫ども出て、子どもをもさしくひ、女をばさしころしてけり。すゞめのこしをうちをられて、ねたしと思て、よろづのむしどもをかたらひて、入たりけるなり。となりのすゞめは、もとこしをれて、からすの命取ぬべかりしを、やしなひいけたれど、うれしとおもひけるなり。されバ、ものうらやみはすまじきことなり。

風の詞

横井知萬多

梅が香おくる春の風はなつかしく、青葉ふく夏の風はゆかしく、秋の月の限なす雲ふきはらふ風はうれしく、雪さそふ冬の風はさむくはあれど、さすがに面白し、されどこれらは皆常のことなり、虎に従ふといふ風は、いかに勇ましからむ、蒙古の軍が仇なひよせける時におこりけむ神風は、皇国のためいかにかしこく、はた喜ばしかりけむ、今外

國と戰はじまりなむときけるを、もしさることとあらむには、今一度ふきおこりて、此の國の船を覆へし、皇神のはじめ給ひ、をさめ給へる皇國は、かゝるものぞと、舌をまかせまほしきや、かくいへば、風といふものは、たゝなつかしく、ゆかしく、うれしく、おもしろく、又勇ましきものかといへば、かの火起りて、家庫などを燒拂ふは、皆この風によりて烈しく、行通ふ船をくだき、人の命を失ふは、大かたこの風によりていみじく、陸には旋風、海には龍卷といふがありて、一たび起りたらむには、人の命さはに失はるとかや、さては四の時にかけての、はかなきことのために、などかなつかし、ゆかし、うれし、面白しとはいはるべき、又勇ましとて希はるゝ事かは、中中に此世の外へもやらはまほしくおもひなりぬれど、ますがに又この風なからましかば、あだかも排氣鐘といふ器の中に、こめられたらんごとく、ありとある人、一人ものこらず、息とまるべきを、なほわか考のいたらぬなりけり。これを思へば、家庫船などのこと思ふ遑あるべくもあらずと、はづかしく思ひて、大空みあぐれば、風は靜かに、けふの暑さに汗はみたる、わが面をふきはらふも、いと心ありがほなりや。

道の志をり歌合（十五）

久志本常幸寄贈

花すゝき招くはさがと知りながら
とゞまるものはこゝろなり鳧

子の日する春の野ごとに尋ぬれば
　　まつにひかるゝ心地こそすれ
物にいざなはれて、心のうかれまどひゆくは、まことに、覺悟の外なるものぞかし。やゝもすれば、物になぐさむとて、かへりて、物になやまされて、いみじうわくがれまどふことぞおほかる、諺に、酒のみが酒にのまるゝといふ、よろづの事に、このおもひはかりあるべし。

櫻ばなおのがもろさのゆふばへに
　　こゝろをさへも散らしつる哉

いかなればうは葉をわたる秋風に
　　下をれぬらん野べのかるかや

ものゝふの妻のみれんなるは、夫までも、心をひかされて、おくびやう風をさそひおこすものなれば、弓矢の家にうまれたる身は、女といへども、勇氣なくてやはあるべき。

愚なるこゝろのひくにまかせても
　　さてさはいかにつひの思ひは

身を捨ていにやしにけん思ふより
　　外なるものはこゝろなりけり

心こそ心まどはす心なれ、操存のこゝろがけゆるかせにすべからず。

兎に角に思ひしことのかはる世は
　　わがこゝろとて頼みやはする

心をぞわりなきものとおもひぬる
　　みるものからや戀しかるべき

人の心の、物にうつりやすき、淺ましきものなりけり。欲すべきを見ざれば、心をして亂れざ

らしむと、老子のいましめけるは、諺に、見るは目の毒といへることわり、とかく物は見るよりしてほしくなりきて、さま〴〵のものすき起るぞかし。奢をふせぎ、費をつゝしむの道は、よしあき品を目にふれざるぞよき。

吹く風に雲のはたてはとゞむとも
　いかでたのまん人のこゝろは
思ひ出よたがかねごとの末ならん
　きのふの雲のあとのやまかせ

人の心の常ならずして、さだめなきさまかくのごとし。みづから内にかへりもとめて、つとめて、實義をやしなひ立べし。たとひ、かりそめの一言も、さふらひの約束は、違ふべからず。うけがひたる事をなはざりにして、人の當惑を

おもはざら人は、無下に情なきいたづらものなるかな。

なきかげに掛たるたちも有ものを
　さやつかのまに忘れはてぬる
人ごゝろうしとも云じむかしより
　くるまをくだく路にたとへて

人情のうすく、世のたのみがたきいかにせん。

さだめなくあまたにかくる武藏鐙
　いかにのれとかふみは違へる
いかにせん逢坂山のさねかづら
　はふ木數多にうつりはてなん

とは、世智がしこき人の、氣節なく、廉恥をきらす、諺にいへる八方旦那の輕薄をいたくにくみて、歎きたるなり。まことに、人くずといふべ

し。

哀れてふ人もなき身をうしとても
　われさへいかゞ厭ひはつべき
身はすてつ心をだにもはふらさじ
　つひには如何なるとしるべく

身のつゝしみ、心のたしなひ、命かぎりにまもり、いかなるうきふしをへても、此心ざしをはふらさゞるぞ、人とはいふべき。

あまつ空てる日の下にありながら
　曇るこゝろのくまをもためや
晴れくもるひとの心のうちまでも
　うらにてらしてすめる月かな

かく天道の照覽をおそれみて、心にくもりなくつゝしみなせ、おのづから、神明の冥加にかなはでやは。

天のはら高しとばかりあほぎ見て
　おほふめぐみをしらぬ悲しさ
もろびとのかゝる日かげの心葉に
　あまてる神のめぐみをぞ見る

かたじけなく人と生れて、天地の冥加をしらず、神明の照覽をはぢざらんは、いとあさまし。

澄みのぼる心やそらをはらふらん
　くものちりゐぬ秋のよのつき
花ざかり春のやまべを見わたせば
　そらさへにほふ心地こそすれ

浩然の氣を養ひ立たるさまは、かくやあらむ。

石清水きよきながれのたえせねば
　やどる月さへくまなかりけり

和らぐるひかりにあまる影なれや
　いすゞ川原のあさのよのつき

目のまへに、いせやはたの神いますがごとくぞおぼえ侍る。うき世の塵にけがれまじきには、これを誦して、心をきよめはらふべし。

あるまじき事をば何といのるらん
　ことわりをこそ神もうくらめ

心だにまことのみちにかなひなば
　いのらずとても神やまもらむ

神は正直のかうべにやどり給ふとなん。罪を天に獲ば、禱る所なかるべし。されば、身をつとめず、道をつくさずして、たゞにいのりて何の冥助かあるべき、神もうるさくこそおぼすらめ。

みなひとの心もみがけちはやぶる
　神のかゞみのくもるときなく

人のみかくもらぬ人のこゝろをぞ
　かみもかゞみと照しみるらむ

天地のやしなひたてしかひもなく、道にたがひ、人たる徳をうしなひて、うとましう此世をけがしなば、たとひ人にとがめられずとも、あなかしこ、天にむかひて恥ざらめやは。

わするなよ老さきかけて子をおもふ
　おやのまもりの庭のをしへを

菅原もとひろ

（をはり）

忠孝二筋道

其八

渡部乙羽

慶長元和といふ年は、百姓武に勇みて、武士は身に小櫻縅の花を着け、月形打つたる兜を頂きて、千軍萬馬と駈けめぐりける程ゆゑ、人氣總じて荒々しく、吉野の春も、松嶋の秋も、詩歌管絃なんぞと、風雅を樂しむ者なくて、男は、駒の足搔に眠を覺せば、牽牛花の咲き間遲しと待詫び、女は夫の腹帶締めて遣り、兎もすれば出陣の兜に、香までも燻き籠めて、討死し給ふを榮とする如き氣風、弓矢は幡座も煙に煤びて、命を鵝毛の輕きに比べしもの、千人が千人までなり。

德川家康公天下を治め給ひしかど、尚は全く靜謐ならぬ世の、今にも事あらばと待構ふる壯丁は、腕を扼して大旱に雲霓を望む有樣なり、秀忠公の御代となれども、未だ太平を謳ふべき春ならず、元和の初年豐臣氏滅びて、世は終に德川氏の有となりてよりは、四民漸く安堵の思ひをなしぬ、それより三代の將軍家光公、元祖の遺訓によりて、諸大名を手馴けて臣下の列に編み、水戸宰相光國卿幕府を輔佐して、

政道を正しうせしかば、六十餘洲靡かぬ草木も無く、千代田の城の松風は長へに吹きて、武藏野の繁昌は、月の入るべき草も無きまでに、民の家居ぞ茂りける。斯かりければ將軍家光公上洛ありて、上下親睦の狀を奏聞し奉り、主上の御震襟を慰め參らせんと、入闕し給ひての歸るさ、二條の御城へ入らせられんと、行列美々敷く、今こそ關東の武威を張る時ぞと、威風凛然と御通りありけり。京都は別けて山青く水清き土地柄とて、風景面白く、人も華奢にして、女性はみな肌の色雪を欺き、眉匂やかに遠山の翠を凝せば、艶なるは天人かと思はれ、婀娜なる姿衣通小町の俤あるもの、いづれも將軍の上洛を拜せんとて、道傍に跪坐き、木蔭に平伏して、儀仗の嚴かなるをうち眺めぬ。

見渡せば都の大路は、柳櫻をこき交ぜて、今ぞ錦を織り出して、西陣の機女も足をとゞめ、幽禪の色もなか／＼なる春景色、近く甍の雲を磨く二條の城は、松の綠に千代を籠めて、鶴九天に聲を洩し、時の太鼓ぞ鼕々と打出したり。

頓て行列は城近う來りぬ。並み居る群集は下に居らうの聲に、我と頭を下げて、將軍の居ます駕輿を見仰る者もなし。

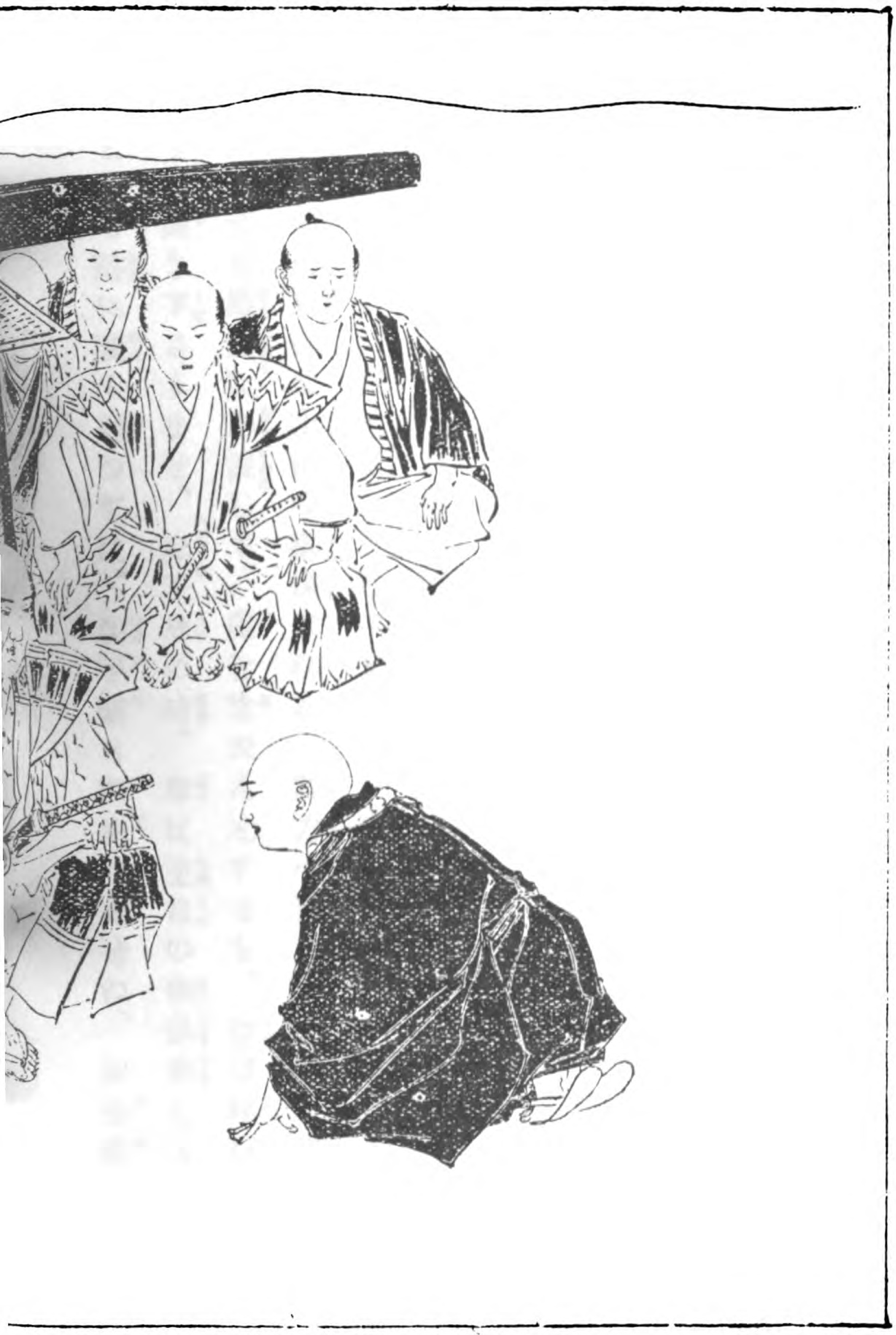
この時までも一人の僧の、未だ年若きが、行列を拜みながら、うろ〳〵と徘徊なしてありけるが、今しも將軍の乘り給へる駕輿の、間近う來る隙を窺ひ、御傍近く進み寄りて、ハッと地上に打俯し、訴狀を高く捧げたり。御供衆は驚き騒ぎ、取抑へて押隔てんとすれども、僧は覺悟やしけん、更に其處を動かねば、短慮の武士ども、刀の柄に手をかけて、慮外者め、將軍家の御供先を妨け致す段、不屆千萬と云ひつつ、討て捨てんと詰め寄れば、時しも輿中に聲ありて、家來共、沙門を聊爾なること致し候なと、將軍家の御諚。駕輿脇の諸士、君に過失あらせじと、駕輿の四邊を取圍み、狼籍者やあらぬかと、四方に眼を配りけり。將軍は駕輿の簾を卷き上げさせ、拮と僧の打扮を御覽せられし後、片頬に笑みを含ませられ。その訴狀受取つて遣はせ、沙門は跡より召連れ參れと、上意あれば心利きたる侍共、御跡に殘りて僧を引立て行く程に、行列は早くも二條の城へ入りたり。

僧は始めより斯かるべしとは期したれども、將軍家の上意までも聽かんとは、夢にも、思はぬ事なりしに、母を慕ひ、主を憶ふの念力は、神も感應まし〳〵けるが、出家の身は命は固より無きものなり、この後直訴の罪により、如何なる憂目に遭ふと

ても、露厭ふべき事ならずと、惡びれもせず、諸役人が云ふが儘に、只ある役所に引かれ行きぬ。

圓頂黑衣の僧とは云へ、直訴の罪を犯せし上は、いづれ亡き身と諦めても、諦められぬ母の事、今日は逃れて明日といふ、明日は悲しき狩塲の雉子、子ゆゑの闇の牢屋へは、何時行くことぞ恐しや、現世からなる地獄の責、經文にある午頭牛頭の、鬼が嶋根に比ぶべき、八丈嶋にましまする、母御は我を忘れしか、十數年の大望も、水の泡ともなるならで、一言彼地に傳へてたも、昔は蘇武の使せし雁、我が音信をもなせがしと、早くも覺悟なしたりける。

暫時あつて役人共出で來り、僧を白洲に呼び出して、其方名を何と申す、なに一心坊とな、してまた俗の名は、澤橋權太夫と申するか、舊主は何れの藩なるぞ、前田肥前守殿ぢや、幸ひ前田殿には上洛の御供なれぞ、其方へ預け置く間、江戸へ參つて訴狀の申開きいたせと嚴重に申渡して、座を立たんとするを、僧は呼び留め。お役人樣先づ一通りお聞き下さりませ、私三歳の時、母は主君の御供申して八丈嶋に參られしが、子として跡に殘り居つては、生甲斐も御座りませぬ、お慈悲に母と一





所に、嶋に遣はされ下さりませせと、人目も恥ぢず泣きければ、一座も涙に濕りけり。

花菖蒲

千稻子

其九

思ひもかけぬ曲者の襲來に、怡樂の夢を驚され氣も轉倒し、庭の木の間に腰を曲げて腕を兩邊に打廣げ、一組み組みて投げ挫がんと力足を陷み張しも、こは如何に、泉水の面二つに劃れて水音と共に曲者の身は深底に沈みしと見ゆ、波のよる〳〵六人の侍は其周圍を取卷きて、黑白の鈍眼を上下にくる〳〵と廻し、忙然として自失することを暫らく、誰れとて水を蹴上げて躍り入りつゝ、そを捕へんと進む者もなし。只浮び出なバ我こそと力筋を撚るも、再び水の表に一片の泡沫も浮來らず。かゝる折、今迄は轉倒したる身の氣付かざりしか、囂々として表の方を行かふ人の足音喋しく聞ゆ。さても怪しと自失したりし精神漸く我に返りて、一同首を擡くる時しも、遙の彼方に、爆然として千百の老木一時に倒るゝが如く怪しき物音のして、

俄に一道の焰火冥天を焦しつゝ中空に走り登る。

之が爲に彼等は再び氣を奪れて魂底を冷し、驚慌狼狽物も覺えず、互に門の扉を破るゝばかりに引放ち、一目散に表へ驅け出づ。

怪しき物音は益々烈しく、黒煙は濃雲の如くに渦を卷きて低く覆ひ高く騰り、數十の焰柱は紅舌を吐きて逆卷き走り、之に連れて颯と落しくる曉の飈風は、綠葉を簸りて木枝を揉みに揉む。

此時、板垣の隅に雲を凌ぎて矗立したる楢の木の間より、先の曲者は、黒髮おどろに覆ひたる蒼白き半顔を表はして四邊を打見廻し、やがて徐ろに立出でゝ片手に提げたる二尺程の白刃を池の中に投げ棄て、腕に抱へたる首を執りて髻を握り持ち木立の隙を透して照し來る彼方の火の光にすかし見、踵に音を殺して拔足しつゝ、侍共が走り出たる跡を追ひ、密に門の扉を潜りて早くも狼狽へ噪ぐ人波の中に混れ入る。

菖蒲の一念は玆に通じて容易く綱範が首を得たりき。

疲れたる身痿えたる腕も日頃の無念に振ひたちて、枕邊に横へ置きたる太刀に彼れ

が隱險を以て滿れたる體を刺し貫き、黒き紫の血糊の滴々として落ち、白眼を瞬りて口惜しげに睨みたる生首を掲げ、漸く庭に飛び出しも、再度の危難に爲すべき術を知らねど、思ひつきたるまゝ足元の石を抱きて池の中に投げ入れ、暫く慌てたる侍の眼を眩まし、漸く其場を逃れて表へ出れバ、

あはや、濃煙は都大路を覆ひ包みて火の粉は翩々として落花の如く飛び來り、千萬の怒濤の巖岩に激して摧くるが如き物音之に伴ふ。

人は縱橫に驅け違ひ、老幼婦女は此處に泣き彼處に倒れ、源氏の兵の攻め入りしといひ平家の公達の都を落ち給ふなりといひ、擾々たる叫聲の日間に悲泣哀痛の聲々耳を打ちて、さながら修羅の巷を眼前に見るが如し。

菖蒲は心も狂はんばかりに驚き、惻然として停立する事稍暫く、やがてかくては果じと思ひ返し、手早く衣を引破りて抱へたる首を包み、息苦しき胸を抑えて一歩も堪へ難き足を踏み堅めつ、揉れつ押れつ惑ひ行けど、西八條洞院一條より美々しかりし平家方の庭宅は、既に皆火焔に呑れ終りて昔の影を何處にか見ん、現世の常なきを表して莊殿麗宮も昨日の夢と變り果てぬ。

菖蒲は、愈々驚き惑ひて飛び來る火の花を潜り、足を空に驅け走る人の袖を捕へ、問はんとすれど誰とて見向く者のあるべきや、左に押れ右に倒されんとして恰も高波に搖られ搖られつ上下に漂ふ海藻の如し。

かく揉れ揉れて汗もしどろに身は煮られたるが如く、疲れに疲れたる肢體は愈々疲れて早や支ゆる事能はず。されどとて今、此場に倒れなむ、忽ち名も知らぬ下賤男が亂足に踏み拉がれんのみ。あはれ此身は尙望多かり。いかで倒るべきやはいかで死ぬべきやは、倒れで此處を過ぎ行かんものをと、我心を呼び起して疲れたる身を振ひ起て、搖れながらも胸の內はかにかくと思ひ廻らす。

今や切に心にかゝるは新中納言殿の邸の樣にぞある、此處と全じく火に包まれしか煙に覆はれしか。あはれ如何にしたまひし、如何になりたまひしぞ。

只願ふ。我身一度知章殿に逢ひまつらまほしや、逢ひまつりて彼方の御有樣も尋ねまほしく此身の成行きも語らまほし。別れまつりてより早や年は再び立返り、君は霖雨に浴して醒風に櫛り給ひ、我身は袂を抱きて獨り音をのみぞ泣く。我心は常に行き通ひて短き蘆の節の間も忘るゝ日間はなかりしが、見奉つらざりし後は如何に

進み行き給ひけん、早く問ひまつりたく聞まほし。いざや一足も彼方へ進まんものと、思ひよ暮れつゝもひるみ行く心根を緩ませじと、悶へに悶へて漸くに此場を離れ抜け、苦しき胸を撫して長へに息をなし、再び後を顧りければ、棟梁などの落つるにやあらん。邊りも揺ぐばかりの音すると共に、火焔は赫々として渦をなしつゝ捲き上る。菖蒲は思はず身を縮めて肌體を震はせり。

やがて心を勵まして進まざる足を引きつゝ歩み行き、暫くして又足を休めて苦しき息を漏らし、心計りは如何に速るといへど身の思ふに任せざるを如何にせん。

かく休みながらも進み行き、頭を上げて館の方を凝視すれば、うたてや火勢は早く凡てを燒き盡したりと見え、古綿の如き色をなしたる煙は風を麾きつゝ、薄く紅き中天を覆ひ隠せり。

菖蒲は死ぬべき程は驚慌して思はずアッと叫び、覺えず知らず足を早めて其側に走り行き、悵然たる顔を擡げて邊りを打見廻せど、爛木四邊に飛散して火焔は尚勢猛に荒れに荒れて悉く之を包み、濃煙も湧くが如く舞ひつ重なりつ其上に横はり、艶も美も麗も優も已に皆其中に葬られて、懐しかりし邸の影も今は昨日の影にあらず、

後には我身の住むべかりし館も一塊の焦土と化し終りぬ。菖蒲は最早や堪へ得ずして其場にひれ伏したるまゝ、千丈の血涙を揮ひて空しく此悽愴の跡を弔ふ。如何に涙を注ぎて悲哀を訴ふるも答ふる者なく、如何に聲を枯らして痛嘆するも對ふる者なく、灘の如くに落ちくる紅涙の何時果つる時もあらず。菖蒲は瞼を拂ひつつ萎れたる身を起し、裏手の方に歩を進めて顧望徘徊しつ見廻せば、繁りに繁りたる緑の青葉も見る影もなく燒れて色悉く黄ばみ、おかしく疊みたる石も眺めよく築き上げたる山も、炎々たる火勢に圍れて黒くくすび、眼中に寫りくる凡ての光景は慘憺悲酸の有樣と變りに變り、感慨の涙は泉の如く湧きて流る。

菖蒲は朽ちなんばかりの袖を絞りつゝ、尚足を進めて人跡の絶えたる木立の蔭に立ち寄り、彼の包を解きて青山が首を執り出し、母の御靈に供へて合掌したるまゝ其處に倒れつ、暫しは云ふ所を知らず。

暫く經て啾々として歔欷の中より、仇を討ち取りたれど御心安らかに眠り給はれと述べ、願くば我身を導きて一度知章殿に逢はし給はれといひ、又身を震はして正體なく泣き崩るゝ。

冷やかなる曉の風は面を拂ひて木立の枝を動かし、共に我が哀痛の涙を訪ふが如く、消えのこりたる數點の星光は煙の間を漏れて心細げに照しつ。

文林

近衛 忠熈

立よれバぬらさぬ袖もしめるまで
木陰すゞしくすめるましみつ

樹陰水　東久世通禧

柳かげあかるゝみづのまたはしき
夏のけしきにはやなりにけり

鍋島 直大

日の影もさゝぬばかりに茂りあふ
青葉がくれのみづのすゞしさ

前田 利嗣

おひしげる杜の木かけを行く水の
ほとり涼しく見えわたるかな

泊水鷄　諏訪 忠元

夕汐のみづのとまりのふねちかく
波にたくひてなくくひなかな

樹陰水　黑川 眞賴

杜となるうゑ木の陰に來てみれバ
岩井のみづぞひとりすみける

山かげの木陰の清水きてみれバ
夏のはかなるところなりけり
宮地　嚴夫

ふきかよふ風も涼しきこのもとに
岩がねつたふみづもありけり
坂　正臣

苔の上に下ゐる小鳥かげみえて
木立をぐらきにはのいさら井
小出　粲

山ざるの來てはをり／＼結ぶらん
月のかげもるまつのしたみづ
谷　勤

夏山のあを葉のかげにすむみづは
したゝる露のたまるなりけり
植松　有經

立よれバ夏なはさむしやまがはの
きしのいはふち松かげにして
大口　鯛二

扇

手にとれバ涼しくなりぬ暑き日も
風はあふぎにすめるなりけり
林　甕臣

朝蓮

花ひらくおともきこゑて朝ごとの
目さまし草ははちすなりけり
三浦　千春

浦蚊遣

かやりたく有明の浦に來てみれバ
けぶりもしらむ佐渡のしま山
石丸　忠胤

原上夕立

西川須賀雄

ふじの峯は雲より上にあらはれて
夕だちすなりうきしまがはら

松代すて子　佐々　豊水

うつそみの代にかたりつぎ松代や
松にひとしき名こそたかけれ

水鷄　草野　隆道

遣水のほそきながれをたづね來て
くひなゝくなり垣ねがくれに

朝顔　柴田　顕光

有明のつきのひかりに咲きにけり
朝めすゞしきあさがほのはな

竹風夜涼　千日　亮

吹風はたけのはやしにあまりけむ
まくらにかよふ音のすゞしさ

月前水鷄　篠原　政禎

田草ひく賤はかへりしゆふぐれの
月まちいでゝくひなゝくなり

樹陰水　鍋島　榮子

陰ふかき大木のもとにたちよれば
涼しくすめるみづもありけり

田上螢　蜂須賀隨子

小山田のみしづにつたふ五月雨の
しづくとみえてとぶほたる哉

樹陰水　前田　朗子

みつえさす青葉の陰にうなゐ子か
水あそびするなつはきにけり

田上螢　柳原　愛子

風渡る小田のさなへのはすゑより

露もこぼれてとふはたるかな

小池　道子

田上螢

稻づまもまだほのめかぬ小山田の
露をてらしてとぶはたるかな

松平　健子

樹陰水

楠のとしをふる木のかげにわく
しみづいよ〱あたらしき哉

保科　節子

生しげるこずゑうつりて此ごろは
みどりになりぬ谷のしたみづ

鳥尾　廣子

螢とぶよるいかならん日さかりも
くむそでさむしまきのした水

北島以登子

河風に吹きおくられてをやまだの
早苗のうへにとぶはたるかな

小笠原艶子

日盛もかせふきたえぬやなきはら
した行く水はなつなかりけり

服部　磯子

吹風のおときくだにもすゞしきを
しみづながるゝもりの下かげ

諏訪　晴子

橋螢

ゆき合の橋にゆきあふさとの子の
足よりさきにはたるとぶなり

田邊わけ子

心

いかなれやみめぐみ深き大御代に
人のこゝろのあさくなるらむ

名所瀧

安東　菊子

松風にしらべかはしてうちひらく　つゝみのたきの音のさやけさ

夕立

尾崎すう子

かみぞなるほし瓜いれよ風さわぎ　雨ゆふだゝんそらのけしきに

瀧螢

師岡須賀子

ともし火はみなきえはてし瀧殿は　ひとり守るはほたるなりけり

螢映水

河野　文子

むすびあぐる手にだに數の影みえて　ほたるとびかふ庭のやりみづ

漁翁垂釣

横井知萬多

商人は、資をなげうちて、利を得むとし、官人は、諛を、其の官の長に奉りて、猶、しなののぼらむことを望み、農夫は、種を下して、秋のみのりの多からむことを願ふ。皆、物、わづかに出だして、さはに得むことを思はざるはなし。そを得むためには、商人は、夜眠ることさへ忘れたるが如く、官人は、頭を、造物の如く、上下して、人の如くもあらず、額づき虫とやらむが如し。農夫は、夏のあつき日にも、湯よりも、あつく沸ける田の面におりたちて、たなひぢに、水泡かきたり、向股に、泥かきよせなどして、體は、鐵の如くにやけ焦げて、此の世の人とは見えず。まして、水の論などする折には、命さへ失ふが多しとかや。あは

れ、かく、わが利をもとむるにつけて、難き世の中に、急がず、騒がず、柳の陰に、竿さしいだし、釣する翁の、安げにも見ゆるかな。下には、いかならむ、見えねど、上には、そが手にて作りけむ簑、うち纏ひ、竹の皮の笠、打ちかぶりて、絹の冠物、錦の衣よそひて、あたり遊び歩く人を顧みひともせず、わがくふばかりの魚を得たる時には、糸をまきて歸り、止まらむと思へど止まり、あけど去る。風ふくとも動かず。雨ふるとも騒がず。天を仰ぎて喜ぶ朝あれば、地に伏して笑ふ夕あり。大かた、うき世のことは、忘れはてたるが如し。あはれ、かくても、この翁は、利をもとむるために、さわぎのゝしる人たちのさまを知れりや。いかに、又、利を求むる人たちは、この翁の心を志るや。いかに。はた、その傍にたてる柳の木、又、常に、ろの前を流れゆく水は、この翁の心をしるや。いかに。

蝸牛を見て　田邊わけ子

世には、さま〲なる虫あなる中にも、かたつぶりばかり、かひあるものはあらじ。おのが家を、事もなげに、せおひて、こゝのくま、かしこの木かげなど、心ゆくかたに移りて、わが世を送ることよ。思へど人こそ、いひがひなきものなれ。住みなれたる所も、さはる事ありて、いづこにか逃れてむとおもふにも、萬のほだし多かれば、よしのゝ山にも、えのぼりやらず。はた、山にわけ入りて住むにも、露霜志のぐ庵なくてやあるべき。

朝な夕なのたづきとするものなくてやあるべき。おもへど、かたつぶりばかり、をかしきものはあらじかし。

ゆふだち

師岡須賀子

あなあつしあな堪へがたしと言ひつゝ見渡せど、向の峯にて、あやしき雲たちさまよひ、をり／＼、音する鳴神のおと、あるは遠く、あるはちかく、草木はなえふし、遣水はかれ、地は、龜の甲のごとさけ、そよふく風のおとなひもなきは、けふのけしきなりけり。かゝる日は、書よまむも、物うく、友がりとはむも、心もとなし。さらば、ゆあみどもして凌がむやとて、あたりの調度ひきしたためたるに、俄に、吹き來る風、いとはげしく、さと散りはふ文どもと共に、ばら／＼とかゝるは、雨なりけり。あなやといふほど、神のおとなひ、いよ／＼、おどろ／＼しく、物とり入れ、やり戸引下しなど、いとあわたゞし。辛うじて、少し、明りゆく空と共に、雨もをやみぬ。はためきし光も、音も、遠うなりぬ。今は、如何に、雨の足も、神のおとも、烈しかりきなどいふ／＼、戸おし開けど、庭は、海なすばかりに、起きかへりたる木草の色、躍り出だせる魚など、先つ程のものとも見えざりけり。軒より、瀧におつる雫も、心地よげなるに、吹く風、いよ／＼涼しくて、晴れゆく影に、夕日の光のさし出でたるなど、此の頃の暑も、苦しさも、忘られぬ。げに、この夕立といふものこそ　夏の日には、こよなき賜にはありけれ。

雜報

●大御惠の、最、洪く大なることは、今更ならねど、我が　大君、皇后宮には、我が軍人の、朝鮮に渡りて、其の務を勵めるを、痛く憐ませ給ひ、先頃、御酒、烟草などの賜ありしに、軍人は、皆、　天恩の渥きに感泣し、彼の地の龍頭山下に於いて、君が代を謡ひつゝ、拜受の式を行ひ、益、奮勇めりとぞ。誠に、畏き、大御惠にこそ。

●皇后宮の御仁慈の、廣く、庶民に及び、聊かの事にも、大御心を注がせ給ふは、誠に、感泣の外なきことゝなるが。この頃も、日本橋十軒店の洋紙商中井支店の雇人等は、去る十五日、相州逗子の長者園へ趣きしに、午後二時頃、其の中の石田達三郎(二十)といへるが、銘酊の上、小舟に棹したりしに、過ちて海中に陥りたれど、朋輩は、大に驚き之を救はんとするに、皆水に慣れざる爲、詮術なく、困じたるに、折柄傍の岩上に居る人ありし故、救を乞ひたれば、速かに、漁船の縄を手にして海中に入り、達三郎が足に縄を結び、漸う引揚げたり。折柄、葉山の御料局には、忝なくも、皇后宮の御逗留在らせられ、香川皇后宮大夫、三宮皇后亮の兩氏は、長者園に滯在せられしにぞ之を聞きて、侍醫今橋重雄氏を招き治療を加へしめられ、幸にして蘇生せしといふ。此の事、畏くも、　宮の御聞に入りしかば、其の夜、三回まで

今橋侍醫を遣はして尋ねさせられ種々治療を施されしとぞ。宮の人命を重んじさせ給ふ御心の程、畏しとも、いと畏こしとて、本人、並に同輩の者は申すに及ばず、皆々感泣せざるはなかりしとなん。

●又　宮には、此の程、三浦郡長小川義周氏が、御機嫌伺の爲參殿したる節、御思召を以て、葉山村人民へ、金二百圓、葉山村小學校へ、金二百圓、田越村小學校へ、金二百圓、御下賜ありしかば、村民一同は、御仁德の厚きに感泣せざるはなかりきとぞ。又、御警衛の爲、出張したる神奈川縣警察部屬官、並に、村長へ、各、金七十五錢づゝ、巡査、及、役塲算生等へ、金五十錢づゝ、酒肴料として、御下賜ありし由なり。又、時々、海濱へ、御運動あらせられ、殊に、過る日、長者ケ崎へ、御遊漁仰出され、御座船にて、手操網を御覽じ給ひ、御機嫌、いと麗はしく、還御あらせ給ひしと承る。

●華族女學校の儉素　同校の風儀は、實に、一般の女學校の模範となるべきは、言ふまでもなきことなりしされど、曩にも、同校生徒の風儀は、華美に流るゝとの世評あるより、細川同校長の、非常の盡力にて、十分、儉德を養ひ、華美に流れざらん樣努めたりしを以て、此の頃に至りては、生徒一般、大に、質素に赴き、服裝の如きも、絹布を纏ふものは、頗稀にして、通常學校服と、不斷着とを區別し、平素、家に在りて、絹服を纏ふも登校の節は、態と、綿衣の校服を着くる程になり、三百四十餘名の生徒中、常に、馬車にて往復する

もの二名、腕車にて通ふもの、總員の五分の一に過ぎず。此等は、極めて、幼少なる者か。若しくは、郡部等、遠隔の地より通學するものに限れる有様なりと。又服裝に關し、數日前、生徒父兄に宛て、出されたる同校の注意書は、左の如し。

女子の服裝は其人の地位資產に相當すべきものにて一定すべきものに非ざるも學校の生徒としては力めて質素を主とし華美の風習に染まざる樣注意すべし當校に於て是迄生徒に對し注意を與ふることを怠らずと雖ども猶家庭に於て同樣の御注意あらんことを望む

明治廿七年七月　　華族女學校

服裝の材料は質素なるも縞柄模樣などのハデに過ぎて本校の生徒に不似合なるは御用捨ありたし

●同校の卒業証書授與式　は、去る十八日を以て擧げられたり。當日の來賓は、小松若宮御息所殿下・土方宮內大臣、同夫人、其の外二十餘名、又、生徒の父兄、保證人等にして、總べて、百餘名なりしが、席定まる頃、生徒一同は、皇后宮御詠「金剛石」「水は器」の二曲を唱へ、次て、生徒二名の洋琴、フヲルクス、リード、同四名の筝、姬小松、同二名の洋琴、ビスマーク、マーチノの奏曲ありて後、細川校長、全科、別科卒業生、及、中小學各級及第生徒總代に、證書を、又、學業優等生へ、褒賞を授與し、夫より、校長の式辭、全科卒業生總代の謝辭、生徒の奏曲ありて、式、全く終れり。尚、卒業生の姓名は、左の如し。

全科卒業生姓名（いろは順）

若村 月子　飯田 千鶴　川畑 愛　横井 總
高島 眞壽　內藤 八重　長坂 さし　中村 しげ
柳谷 初　有馬 いよ子　壬生 糸子

別科卒業生

西村 直江　土井 榮　三橋 敬子

細川華族女學校長告詞

高等中學一級ノ諸氏ハ學ヲ勤メ行ヲ脩メ成規ノ課程ヲ經ヘ今日卒業證書ヲ領受セラル啻ニ諸氏ノタメニ賀スルノミナラス抑〻亦本校ノ榮トスル所ナリ

本校教育ノ要旨ハ教育ニ關スル勅語及皇后宮御令旨ノ命スル所ニ從フモノニシテ教員タル者之ヲ以テ誘導スルコトヲ力メタリ余モ亦時々訓戒スル所アリテ其闕漏ヲ補ヒタレハ今更之ヲ反復スルノ必要ナカルヘシ只諸氏ノ心肝ニ銘刻シテ遺忘セサランコトヲ望ム

想フニ女子ノ卒業後ノ情態ハ獨リ學校ニ通學スル時ト同カラサルノミナラス他人ノ家ニ嫁スルニ及ヒテハ家庭マテモ本來ノ家庭ニアラサルヘシ若シ平日ノ學ヒ得タル所ノ者ヲ墨守シテ變通セサルトキハ扞格ノ恐ナキニアラス庶幾ハクハ諸氏善ク變通シテ以テ其學ヲ實際ニ應用セラレンコトヲ

全科卒業生總代壬生糸子謝辭

吳竹の世さ共にすゝみ、年每に榮ゆ行くは、皇國の一筋に、榮ゆまし〻、わか　天皇の志りへの御政きこしめす、后の宮の、深く學ひの道を重んし給ふ御心もて、たてさせられし、此文の林ならむかし、けふしも、六回の卒業證書授與式を行ひ給ふ、おのれら數ならぬ身ら、この文の林に立ちましり、御惠のつゆにうるほひつゝ、過きにしは二とせ三とせと思ひしか、行く水のやます過ぎゆきて、つかのまに十年となりぬ。皆の根の永き年月、いつくしみ給ひし后の宮さ、ねんころなむねさして、導きたまひし校長の君をはしめ、師の君たちの御敎さにより、身にあまる學ひも、かつ〳〵習ひをへて、今日のにはのはしにつらなり、此志るしのふみたまはる嬉しさは、言の葉にゐつくされす、涙は海士の袖ならねど、かはくひまなし。あはれ山より高く、海より深き御惠に、報い奉らむには、心の鏡をみかきて、行を正しくし、女の守るべき道を修めんには志かじ。今日此志るし文得たるはれら、皆心を合せ、四季をり〳〵、春の花秋の月につけ、思ひ出てつゝ、大御旨を堅く守り、道芝の露のまも忘れす、おのが身を君よさゝげ奉りて、秋の宮居の大御めぐみの、萬が一をだに、報い奉らまほしさは、せまき心にあまり、もし怪草かきつゝる言の葉もおぼゐす。唯うれしさのあまり、せまき袂につゝみかぬる喜びを皆人ひさつ心に謝し奉るになむ。

全科卒業生内藤八重謝辭

千早振る神代より、つがの木のつぎ〱に、久方の天の下しろしめす、代々の帝の、おほみたからを撫でいつくしませ給ふ事、秋の山の木の葉よりも深く、春の園の花の匂ひよりもこまやかなり。さておほんいつくしみの餘りに、あかりたる世より、學びの庭といふものを設けさせ給ひ、おひさき長き民草をして、人のふみ行くべき、五の道を始めさし文よみ物かくわざなど、學ばしめ給ひてけり。しかはあれども、女郎花の、かゝる庭におひしけりしためしは、いそのかみ古き昔を尋ねても、更になかりけり。此事明らけく治まる、今の大御代に至りてなむ始まれりける。これかけまくもかしこき、わが　大君、開けゆく世の様を、神ながらおもほしたればなるべし。然るによりて、いはまくもかしこき、　后の宮はた、山の井の淺からぬ大御旨をもちて、去りぬる年、この文の林は開かせ給ひにけり、かゝりければ、この林に分け入りて、學びの道をたどる女等は、朝は筑波山のかげよりも茂き、御惠の露にうるほひ、夕に伊勢の海よりも深き、おほんいつくしみの波にあみするぞかし。我等二葉の比より、住吉の松久しく、秋の御山の高き御かげを仰ぎ奉りつゝ、師の君たちの厚き御いつくしみによりて、女の守るべき道より始め、家を治め、おさな子をはぐゝみ、衣たちぬふ業から、大和の文の奥く、或は外國のことゝひまて、かづ〱なんあされりける。爰に今日しも、此花やかなる式のにはにつらなりて、久方の月の桂を手折り、學びの庭をいでなんとす、かたじけなしともうれしとも、花すゝき穂に出でゝは、えいひつゞけず。麓の塵の數ならぬ我等がめいほく、何かこれにまさるべき。此嬉しき門出に、校長の君の、あまのたくなはくりかへし、淺香の山の淺からぬ大御旨を、短きあしのふしの間も、な忘れそと教へ諭させ給ふ、御言の葉の光りさへ、さしそへ給へるこそいみしけれ、つら〱思へば、われら今より朝の露の移ろい易く夕の雲の定めがたき世にうち出てん事、たとへば、知らぬ旅路をひとりして行かんが如し、或はぬば玉のやみ夜に山深くふみまよひ、あるは荒磯の岩うつ波の音に、心をくだく折ふしなしともいふ可らず。或しも深き大御旨をしるべとし、厚き御教を力とたのみつゝ、はふつたの遠長く、玉の緒のたえぬ限りは桂のかざし塵をもすゑじと、おのも〱むらきもの心に誓へる一ふしを、おふけなくも學びのはらからたちに代りて、拙き詞にうちいでて、あはせて校長の君の、しめし給へる御詞に、答へ奉るになんありける、あなかしこ。

●邪教の害毒　は、今更の事ならねど、其の害の、往々、學校教育の上に及ぶことゝあるこそ、最、恐るべきことなれ。某女學校の卒業式場にて、先、唱歌、祈禱、をなし、後に、勅語を捧讀せるが如

きは、これ、現に、我が大君を、第二の尊者となし丶ものにて、畏きことの極なり。嗚呼、斯かる大義に悖れる主旨の教育を受くる女子は、其の身、既に、誤られ、延いて、兒童に及び、遂に、世道を禍する基となれるものなり。諸嬢、能く、正邪を明めて、な惑ひ給ひそ。

●北條侍從の學校視察　氏泰子は、上旨を承けて、去る十二日午後、神田一橋通なる共立女子職業學校に赴き、授業の模樣より、製作品等を視察せられ、且、生徒の製作品を、叡覽に供へ奉るべき旨を、口達せられたれば、同校は、仰ごとを畏み、凡、一ケ月の猶豫を願ひて、造花、刺繡等の製作に、大に努め居るとぞ。これ、唯、同校の榮のみにあらずして、婦女一般の榮譽とぞいふべき。

●鳩山博士の夫人　春子ぬしは、豫て、共立女子職業學校の英語の教授をなしつ丶ありしも、和服裁縫の術に暗かりしより、其の身は、教師にてありながら、同校裁縫科の生徒となり、其の末席にて、稽古をなしたるは、今より三年前の事なるが、今年今日は、其の卒業期にて終に、卒業證書を得たりとぞ、其の身分に拘らずして、其の藝を勉めたるは、誠に、賴しき心掛とこそいふべけれ。

●音樂學校　高等師範學校附屬音樂學校にては、去七日、卒業證書授與式を擧行し、第一に、同校主事上原六四郎氏の報告あり。次に、高等師範學校長嘉納治五郎氏、卒業生六名(男一名、女五名)に、卒業證書を、豫科卒業者十八名(男十五名、女

三名)に、修業證書を授與し、終りて、式辭を述ぶ。次に、文部次官牧野伸顯氏の式辭、卒業生總代麻生ふく子の謝辭朗讀あり。之にて、式を終り、夫れより、前後八番の音樂演奏ありて、一同退散せり。當日、重なる來賓は、田中樞密顧問、同夫人、木場普通學務局長等なり。卒業生の姓名は、左の如し。

洋琴	東京府平民	麻生ふく子
同	群馬縣士族	三浦みは子
同	神奈川縣士族	西川とり子
同	東京府士族	野村かく子
ヴアイオリン	岩手縣士族	原田ふじ子
同	群馬縣士族	高濱孝一

同校の現在生徒は、右の六名と、もに、七十四名にして、男生女生各半し、近來男生割合に増せりと。

主事上原六四郎報告

本日當校第七回ノ卒業證書授與ノ式ヲ擧クルニ當リ例ニ依リテ先ツ本學年間ニ執行セル當校事業ノ概略ヲ報告セントス

當校ハ昨明治二十六年六月二十九日勅令第六十二號ノ結果ニ依リテ同年九月十一日ヨリ高等師範學校ノ附屬學校ト爲リテ稍ゝ組織ヲ變セリ然レトモ其事業ハ敢テ從前ト異ナルコトナシ而シテ昨年九月入學ヲ許可セルハ各自ノ志願ニ係ルモノ十五名又各府縣廳若クハ諸學校ノ特選ニ係ル者七名合計二十二名ニシテ當今本科豫科其他ノ生徒ヲ合セテ總計七十四名ナリ就中特選生ヲ各府縣ニ募ルノ主意タルヤ目今ハ尚ホ普通學上音樂ノ良教員缺乏スル時ナルニ依リ尋常師範學校、中學校ノ卒業生又ハ教育上既ニ經驗アル者ヲ入學セシメテ其闕ヲ補フニ在リ兩三年間ノ經驗ニ依ルニ頗ル喜フヘキ結果アルカ如シ故ニ來ル九月モ亦例ニ依リテ此種ノ生徒ヲモ募集スルコトゝセリ本年ハ師範部生ニ卒業スヘキ者ナクシテ本日卒業證書ヲ受領スヘキ者ハ皆專修部生ニシテ其數六名ナリ内「ピヤノ」專門ノ者女四名、「バイオリン」專門ノ者二名内一名男生ナリ豫科卒業生ハ十八人内男十三名、女五名ナリ

本學年中學科諸規則等ノ變更ハ豫科生入學ノ試業課目ヲ改正シテ稍ゝ其程度ヲ高クセルト新ニ小學唱歌講習科ト云フ一科ヲ設ケタルトニ在リ從來豫科生ノ入學程度ハ高等小學科卒業以上ノ學力アル者トシ其旨トスル所ハ入學試業ヲ容易ニシ成ルヘク耳

官指手ノ柔軟ニシテ教化シ易キ弱年者ヲ募集スルニ在リ此事タル今後トテモ音樂ノ熟達ヲ期スルニハ必要ナル事柄ナリト雖モ實際ハ然ルヲ得ス幼弱ニシテ入學スル者多カラス男子ニ於テ殊ニ然リトス隨テ入學者ノ學力モ自然ニ入學程度ヨリ高キ現狀ナリ加之一昨年來實施セル學科ノ變更ニ依リテ在學生徒ニ相應ナル學問ノ素地アルヲ要スルノミナラス當校ノ卒業生ハ概子諸學校ノ教職ニ從事スルカ故ニ其品位上ヨリ考フルモ獨リ音樂ニ係ル技術ノミナラス少クモ普通ノ教育アル者タルヘキハ論ヲ俟タサルナリ是レ本學年ニ於テ入學ノ程度ヲ稍ヽ高クセル主旨ニシテ來ル九月ヨリ此程度ニ依リテ生徒ヲ募集スルコトヽセリ又新ニ小學唱歌講習科ヲ設ケタル所以ノモノハ當校ニ於テ從來實地授業法ノ設ナキニアラサレトモ其結果ニ猶ホ望ム所アルニ依リ今回該講習科ヲ設ケテ一ニハ最終學年ノ生徒ヲシテ實地ニ授業ヲ擔任セシメ當校教官之ヲ監督シ以テ授業法練習ノ足ラサル所ヲ補ヒ又一ニハ僅々一箇年ノ課程ニ依リテ小學用ノ唱歌、樂器ノ練習及音樂理論ノ一斑ヲ授ケ以テ目今世間ニ不足セル小學校唱歌科ニ適良ナル教員ヲ養成スルニ在リ尤モ小學校トテモ成ルヘク唱歌科專科ノ教員ヲ採用スルヲ望ムト雖モ方今ノ事情猶ホ許サヽルヘク且ツ他科ノ教員ト同シク教育上一般ノ智識アルヲ要スルヲ以テ該科ニ入學スヘキ者ハ既ニ教育上相應ノ資格アル者即チ教員免許狀ヲ有スル者ニ限レリ是レ亦來ル九月ヨリ實施スルノ見込ヲ以テ既ニ其募集ニ着手セリ

以上本學年ニ於ケル當校事業ノ大要ナリ

學校長嘉納治五郎式言

本日ヲトシ本校生徒卒業證書授與ノ式ヲ擧行ス文部次官閣下及紳士貴女各位ノ賁臨ヲ辱クス本校ノ光榮何ソ之ニ過キン諸子ハ幾多ノ歲月本校ニ在リテ刻苦淬勵能ク生徒タルノ本分ヲ守リ學成リ業終ヘテ本日此光榮ヲ荷フニ至レリ是レ固ヨリ諸子カ平素勤勉事ニ從フト本校教授教師ノ薰陶其宜シキヲ得ルトニ出ルト雖モ抑ヽ亦昭代ノ餘澤ニ出ツルモノナレハ諸子ハ將來努力シテ之カ報效ヲ期セサルヘカラス

夫レ教化ヲ宣ヘ風俗ヲ正スハ經世ノ要道ナリ而シテ風ヲ移シ俗ヲ易フルハ樂ヨリ善キハナシ諸子ハ益ヽ學藝ヲ練磨シ我邦音樂ノ改良進歩ヲ計リ以テ教化ヲ助ケ風俗ヲ正サヽルヘカラス諸子ノ責任亦實ニ此ニ在リ

余ハ此光榮アル式場ニ臨ミ諸子ノ卒業ヲ祝スルト共ニ余カ將來諸子ニ望ム所ヲ述フルコト此ノ如シ諸子其レ旃ヲ勉メヨ

牧野文部次官祝辭

茲ニ卒業證書授與式ヲ擧ルニ方リ親シク卒業生諸子ニ向ヒテ祝辭ヲ述ヘントス

抑ヽ音樂ハ人ノ性情ニ至大ノ感化ヲ起シ世ノ風教上ニ非常ノ勢力ヲ及ホスハ已ニ定論ノ存スル所ナリ而シテ今諸子ハ專修部ニ於テ各科專門ノ音樂ヲ修メ之ヲ卒業シタリ諸子其學ヒタル所ナ

利用スルニ方リテハ音ニ之ヲ以テ己ノ性情ヲ養フニ止ラス更ニ進テ旋律ノ改良、新曲ノ製作凡ソ音樂ニ關スル各般ノ進歩ニ盡瘁シ本校專修科設立ノ目的ニ副フヲ勉メハ即チ國民ノ性情ヲ温良純正ニ誘導スルニ於テ其功績尠カラサルモノアラン況ヤ本邦音樂ノ改良スヘキモノ頗ル多ク其前途渺漠タルモノアルニ於テヲヤ諸子之ヲ勉メヨ茲ニ企望ヲ述ヘテ祝辭ニ代フルコト然リ

卒業生總代麻生フク謝辭

過ぎゆく月日に關守なく咲きちる花にわか葉さしつぎ紅葉の枝に木枯ふき四季なり〱の思のうちに、おもへば妾がこの學校よ通ひそめしいにし年もまだきのふけふのごと朝に夕に師の君たちのいとねもごろなる御教にほだされあだしごとはうち忘れ言葉の林文の山かきわけたどる爪琴の志らべつたなき妾等ゆゑあふげばたかし久方の月の桂の玉の枝「オルガン」「ピヤノ」「バイリオン」數のをしへに日をおくり早や四年の春すぎてめぐみもあつき夏の最中學の道に因緣ある七月七日てふけふの日に式の席に集ひ給へる諸人の前にていと嬉しくも卒業證書を賜はりかれてまた文部のおとゞ、つぎのつかさをはじめ奉り校長の君、師の君たちよりかたじけなき御言葉をさへくだされ賤が身に着る栲布もけふは錦の光やそへ侍りぬ、あはれ、つたなき吾〱どちもかゝる恩惠の露ににほひいかで花とやはさかであるべき、ゆめ、今よりひときははげみうき世の道の高山嶺山岩根木の根踏みさくみ教をうけしちからの限り身をつくしてむくいは侍らましと心にちかひ、わきては賜はりし御言葉のかたじけなさにこたへんためいさゝかおなじ學びの人々にかはりつたなき筆してこゝにかくなむ

●東京女學館　に於いても、去る十五日、卒業證書授與式を擧行し、高等専門科、(英語會話)卒業生に、證書、優等生に、賞品を授け、生徒の唱歌、辻館長の式言、生徒の洋琴獨彈、英語暗誦等あり。次いで、土方子爵の祝辭、卒業生の謝辭、並に、西村茂樹氏の、婦人の心得べき道などの講話あり。其の他、唱歌、彈琴、英文、國文の朗讀等ありて式を卒へたり。當日、卒業の證書を得たるは、津輕りき子一人なりき。

●徳川大夫人　美賀子の方は、去る九日を以てみまかられぬ。夫人は、皇后宮の姉君に渡らせら

れ、初は省子と稱へ、天保六年七月十七日生にて、御父は、正二位菊亭公久公なり。後に從一位一條忠香公の養女となり、安政二年十一月十一日、德川家に入輿あり。夫人、天性温良にして　慈愛の心深く、慶喜公の大政を返上せられし時などは、内助少からず、維新の後は、公に從ひ駿河に移りて靜かに歲月を送られしに、本年四月頃、乳癌にて、南豊島郡千駄ケ谷村なる從三位家達公の邸にて、療養ありしに、先頃より、痛く、暑氣に侵され、遂にみまかられたり。年齡六十。宮中より、特に、勅使を以て、御弔詞を賜はり、皇后宮よりは、特使を以て、御弔詞あり。十五日、上野寛永寺に埋葬せられたり。夫人子なかりしかバ、數人の男女を養はれたりしど。又、能く儉素を守り内政を治められしなどは、實に賢明の行とぞいふべき。貞肅院殿の御諭こそ、實に、能く相かなへりとぞいふべかりける。

●義擧　門司の豊後町の日野しづ女は、此の程、二千金を獻納して、朝鮮なる、我が隊軍に贈れり、ど。其の報國の義心あること爰に至れるは、誠に感ずべきことなり。

●褒賞　を賜はりし、各地方の孝婦貞女は、
の如し。

福島縣伊達郡伏黒村大字伏黒　佐藤　たか

夫鳴原嘉八カ明治十一年狂疾ニ罹リシヨリ病沒マテ凡ソ十五年ノ久シキ貧困ノ中ニ在リテ藥餌看護怠ナク加之婦女ノ一身ヲ以テ多數子女ヲ撫育シ且ツ能ク公私ノ義務ヲ盡シ今猶ホ精業スル段其貞操奇特ナルヲ以テ其賞トシテ金三圓下賜ス

茨城縣常陸國新治郡志庫村　塙實母　勝田　むめ

資性温良克く舅及夫に事へ初夫中風症に罹り後終に癈疾の身さ

爲るや家益々貧困に陷ると雖も毫も屈撓せす專ら力役と機織とに從事し兼て病夫を看護す尋て舅又疾に罹り養祖母亦老疾を發するに及ひ拮据家計を維持し獨力以て藥餌の資に供し能く病者の嗜好を充たしめ夙夜鞠躬看護奉養懈らさる十有九年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金五圓下賜す

京都府加佐郡四所村字曾井　小谷治右衛門
妻　くめ

母ふく明治十五年の頃より中風症に罹り起臥自由ならす夫妻心を協せ晝夜看病に意を竭し飲食其需に應じ孝養怠らざること十餘年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として木杯一箇下賜す

同郡同村同字小畑九右衛門妻　ゆく

夫九右衛門明治十三年の頃より病に罹り起臥自由ならす家計窮迫中能く看護に心を盡し幼者を慈み日夜家業に勵精する段洵に奇特とす仍て其賞として金一圓下賜す

京都市上京區岡崎町片山幸助妻　もと

夫幸助明治十二年以降疾病に罹り身體自由ならす依て其起臥を扶け飲食を奬め夙に起きて撚絲の內職に從事し側ら洗濯の業を營み僅少なる賃錢を得て夫の嗜好する食物等を與へ貧苦中能く看護の道を怠らざること十數年一日の如し其貞節衆に超絶し他の鑑範と爲る洵に奇特とす仍て其賞として金一圓下賜す

靜岡縣八名郡玉川村飯田彌次郎長女　たけ
明治九年一月生

性孝順品行方正にし父不治の難病に罹り尋で母も亦產後疾病に罹れり家素より貧困なれは晝夜家業に精勵し能く看護孝養を盡し三人の弟妹を愛撫し到らざる所なく母死後專心父の疾苦を慰め餘暇あれは以て父の嗜好に備へ多年一日の如し鄉閭擧て其純孝を稱す洵に奇特とす仍て爲其賞金參圓下賜候事

香川縣那珂郡六鄉村　亡勝田粂治妻　馬場　まき

平素貞順能く夫を幇けて家計を補ひ夫粂治沒後拮据經營獨力以て一家十人の口を支へ特に舅姑に事へて孝養怠なく數年一日の如く其篤行洵に嘉賞すへし仍て其賞として金二圓五十錢下賜す

あら浪も
よせくる方に
かへるなり
人を
なにはの
あしと
思ふな

教の庭

七月廿日兼題　小督局

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　大坂市東區大手町　土生　滿子

琴の音も月もすみぬるさか野には
駒もこゝろのひかれきにけん

地　岩手縣氣仙郡盛町　高橋千代子

露ふかきさか野に袖やそほちけむ
あかぬ雲井のつきをこひつゝ

人　長野縣長野町　坂口しん子

思ひきやさか野の奥のおみなへし
くも井のにはに又咲かむとは

隠れすむ嵯峨野の奥のことの音に　片岡　光子
むかへをまつの風かよふらん

嵯峨野なるつきにしらぶる玉琴は　青木　春子
きみのこゝろをひきよせに鳧

住みなれし都はなれてあはれ世の　永井さい子
さか野のおくに月を見るかな

久方のくも井のつきはつゆふかき　内田　慶子
さか野のおくにてらしぬる哉

澄む月にたなびきわたるうき雲を　河野　久子
こゝろたかくもいとふ君かな

つま琴にひかれし笛の音もさやに　佐々有隣子
たちしまことぞ世に類ひなき

かき鳴すさか野の夜半のつま琴は　平塚千代子
うき身を忍ぶしらべなるらん

いかにして世にしられけん雲深き　千々波橘子
嵯峨野の奥のつまごとのおと

憂き世をバ嵯峨野の奥に捨ながら　北川　眞子
つゆもわすれぬこゝのえの月

忍びても世にしられたる琴の音は　上野　兼子
　清きこゝろのしらべなるらん

嵯峨の野の月にしらぶる琴の音に　高井　米子
　こゝろやいかにすみ渡るらん

名に高き嵯峨野の月にこまとめて　石井　德子
　わびにわびたる糸たけの音や

世を忍ぶさか野の奥のかくれがに　平野　君子
　むかしをしのぶ琴のねぞする

君を思ふまことは琴の音にたちて　綿　くわの
　さか野に駒のよるもまよはず

笛の音にかき合せけりいにしへを　河田いし子
　こふるさか野の夜半のつま琴

思ひきや月にさねゆくふえのねは　羽田三緒子
　わかつま琴に吹きあはすとは

隠家もしられぬる哉さがのおくの　井出　信子
　つきにしらぶるつま琴の音に

かきならすむかし忍ぶの爪おとに　岡部　豊子
　いよゝさえゆくさがの野の月

夏の日の暑さにいとゝこりながら　菅谷こう子

　また手折るゝをみなへしかな

いにしへのさか野のおくに女郎花　瀬戸さと子
　世々につきせぬかをりなりけり

人とはぬ嵯峨野の奥のおみなへし　大橋　廣江
　めぐみの露のかゝるべしやは

ひらきもの心のたけを音にもらし　大橋　庄子
　琴のしらべにきみしたふらん

久方のくも井はるかにきこゆらん　大橋　兼子
　さか野に忍ぶことの音いろは

名にしおへむ此も浮世のさがなれや　明石　榮子
　月にすみたるあはれことの音

月すめどこゝろの雲ははれやらず　加島　貞子
　こゝもうき世のさがのおく哉

松風にことのしらへのかよはずば　内藤　清子
　さがの住家は知られざらまし

九重ににはひはれにしをみなえし　渡邊　益子
　はてはさが野の露にやつれぬ

かきこもる嵯峨野のおくの女郎花　吉敷たけ子
　琴のしらべにきこえけるかな

九重のはなにつれなきはるかせも　横敷たか子
つきの哀れに吹きやしぬらむ

かきこもる憂世のさかの奥しめて　吉田　芳子
又もくも井につきを見るかな

琴の音の雲井にたかくきこゆけむ　坂口たみ子
つきの光りもすみわたるなり

露しげきさか野の秋のそでの上に　土山八重子
やどれる月のかげぞ澄みける

世にさかる身をとゞめても心には　坂口すゑ子
くも井のつきの影やどしつゝ

露しげきさが野のおくの琴の音や　師岡千代子
雲井のそらにひゞきたりけむ

ありし世を忍ぶ小琴にかよふなり　野尻　鶴子
嵯峨野の奥のよはのまつかせ

嵯峨の奥に身はかくれても久方の　宮地　琴與
くもゐのつきや忘れかねけむ

照るといひくもるといひて憂秋に　神田　春子
ひくやなみだのつゆの玉こと

あたしよの嵯峨野の奥に隠れても　神田　靜子
雲井のつきやわすれかねけん

隠れても顯はれやすき世のさがを　神田　花子
つきにうかれて琴や引きけん

雲井よりさす月かげのなかりせバ　溝口　信子
さが野の奥にはなを見ましや

嵯峨の野の月にしらぶる琴の緒に　大橋てい子
ひかれつゝよる雲のうへびと

とぢはてし嵯峨野の奥の柴の戸に　大橋さる子
たへなる琴の音にや知られし

雲井をばはなれつれどもてる月に　山田　先子
なほ澄みわたるつき琴のおと

世のさがに身はのがれても久方の　高橋　政子
くも井の月はこひしかりけむ

世の塵を暫しのがれてさかの野に　藤澤　元子
ゆかしくたてるおみなゑし哉

世をしのぶさが野のおくの女郎花　大屋　丙子
ゆかしき名をもたてゝける哉

君をしたふ心つくしのことの音は　堀江　鈴子
さか野の奥にあらはれにけり

松風は世のうきくもをはらはずて　土屋てい子
そでもあきなるさがのおく哉

音すみて嵯峨野の奥にきこゆなり　伊達貞子
たがつま琴のしらべなるらむ

今もなほかんばしき名に殘りけり　岡佐波子
さが野の奥のあきのしらべは

かきらなす嵯峨野の奥の琴の音の　篠原美能子
雲井たかくもきこえけるかな

七月廿日兼題　扇の說

天

長野縣長野町　吉田芳子

一條一裹は世の常とは言へど扇てふ物こそいみじう敢果なきものなれ實に黄金をとかすと唐歌にも言ひけむ此頃の暑さに木の下陰も水のほとりも音なふ風の露ばかりもなけれど如何にしてかは堪へ忍ばむされど九重の大宮人より賤の山かつに至るまで時ならぬ秋をさそふ扇の風を命とたのみてまたゝくひまも手ははなちかねて打ちあふぐなりされど荻の上風やうやう身にしむ頃にもなりぬれどいつしか夏の名殘も忘れ果てゝそこの箱かしこの棚など或るは幼兒のもてあそびに打ちこぼたれて昔の面かげさへなくなりぬる實に敢果なき限りなりさはいへ昨日まで數多召使などにかしづかれしきはにありながら今日はいぶせき巷にさまよふ浮世の習ひもあはれど敢果なきはひとり扇にのみ限るべきかは

地

府下芝區三田四國町　師岡千代子

たへがたき暑にあふぎまさぐりつゝ思ふやうこの扇といふものよ照りはたく夏の日かげにそよふく風のおとなひなく水の上さへ無ことくになりぬるこの頃のあつさにもつきせぬ風のやどりとなりて暑わするゝは是にまさるものなしされバ月にたとへふじの山によそへてめではやすなりけり檜あふぎといへばたふとく妹にあふぎといへばなつかしかはほりといへばをかしく廣末といへバめでたしやさるはこのかなめといふものもて或はとぢあるは開くなど人の心の戒にもなさばなすべく只涼しき風のやどりとのみもてはやすべきかはとをもふ

をりしも傍にありあふ書の中にふと目とまれるは鶯花園の主人の物せられし文なりけりそが中に

誰が手にもおこせば起る風ありと
あふぎは人に覺えさせけり

とあり實にこのうたの如くいかにめでたき扇なりともおのづから涼しき風の起るものにあらずいかにあやしき扇なりとも其の要の全きかぎりはあふがば其のほど〳〵の風はいたらむおのれいかにつたなくとも怠らず學びなむかわばかりのことは智るふしもありなんかと獨言つゝ文机にむかひてもなほ放ち難きはあふぎなりけりよし秋風はふくともいかでか捨てらるべきなど例のよしなし事いふもあふぎのわざならんかし

佐々有鄰子

扇はくさぐさあるなかに檜扇のまき繪は夏なほ冬めきてふじのねの雪をみる人の松の下かげに立よりたる伏見に名をえしは手弱女の製かと想へむ是もなづかし尾張の名ごやとかいへるところの品も東都の團扇も一種のものにてをりからいと涼しき風も起すべうおもはれてまたゆかし國々縣々の製造品許多あるべし一々手ならして見まほしうなん

岡部　豊子

過ぐる六日のことなりかし夕立雲のむらがりて見る間にはら〳〵と降りいでゝ一時ばかり車軸を流さんばかりの大雨に草木を濕めり苔むせる庭の置石も色まして涼しげなるがやがて雲晴れ渡れば夕日に映る夏菊の露の光りに小雀のつどひ來て雨水の鏡の中に羽をろゝぐなど鳥すら日中の苦しみたへざるならんなどうち見遣りて一しほに心すがすがしうおぼゆるほど如何なる仙界に入りにけん世にも麗はしき天女の御姿顯はれて手には美くしき花鳥の繪扇いと徐やかにかざしつゝ悠然としての給ふやうこは我が秘藏の扇なり一たびうち開けば木の間に通ふ松の風湖上に立てる小浪風花の香誘ふ春の風雪の曙の嵐にもをさ〳〵劣らぬ妙風の吹出て如何ほど暑き夏の日も學びの憂さを忘るなりさてこそ人の愛づるなれされどこの扇も要なく

はいろ〳〵の風もおこらず世に美しき絵扇も何とて人の愛つべきぞ思ひ見よやとあきらかに仰はする御聲の聞ゆと思へどその光りある御姿は消えて跡さへ無かりけり心留めて能く見れば身は一本の檜扇と佛書一卷膝に置きたるまゝゐたりさては南柯の夢なりしかさるにても耻かしや魂もなき扇すら却て我を敎ふるに春秋富める身の心ゆるみてゐねふりなどはした無きわざを若し人の見もせんにはうたてき人とや笑ふらんかく怠りてあらんには扇の要なき如き浮世の人に棄てられん嗚呼我ながら片腹傷きことしてけりと衣拂ひて立上り玉の井の淸き流れに嗽ぎ心淸めてまたの日の怠り誡しむよすがにと夢裡の扇の誡めを記して心にろなふるなり

菅谷こう子

扇は樣々のものもて造りまたかたち用ひかたも最多るになむありたるよには國まもるますらたけをか陣中にもてこれをつかひたりとか今はさることなしされど吾大御代の正しき禮式の座にはこれをもちひぬ此頃異國などへ年毎千四五百萬枚を輸送するとかやそは大方あつさをしのぐになむあるべき寶に之をもてあふげは夏もあつさも打わすれぬいともめでたき具にこそ

坂口しん子

此頃の暑さに風もまれなれば棚の箱にをさめおきたる扇とも數多とり出でゝ何れかよからんと一つ一つならし見るに古ひてこそ見ゆれ何れも出す風の新しけれバまた夏深からぬにいつしか秋近き心地のせられてはては手もうちおかれならしつゝけたりや

宮地琴與

扇はまた末廣とも言ひてひとり風をあふぎ出すのみかは末ひろがりたる姿さへいとめでたくなつかしきものになむありけるあはれ扇よあらかねのつちもやけなむとかりあつき夏の日には涼しき風をいだして人のくるしみをすくひ折にふれてはものをのする器も用ひられまたまどゐときなんどには日おはひともありなほくさ〴〵のはたらきをな

してもの丶用をと丶のふるになむ此の扇のよくさま〴〵の用をなすのみかはいとめでたきすがたをさへそなふるは専らそのかなめのいとよくしまりてかたくをさまれるによることと今更言ふべくもあらずかにもかくにもものはそのかなめをよくをさむるぞむねとあることにはありけるかの身を修め家をと丶のふてふこととも言ひもてゆけばこのことわりをおし及ぼして行ふに外ならずされど此のただ前にいへるくさ〴〵の用をなすのみならでまことにあふぎて末廣く人の道をもとむる鏡となすべきものになん

土屋てい子

手になれて時にあふぎの風よりぞ夏のさかりはおとろへにけるとは契仲阿闍梨が詠じたまひし歌なりさても扇にはさま〴〵のしなありて枝扇のわきて涼しきにあこめ扇はうへの女官たちの手になれて桐壺の更衣のわた殿を行かひにまふまもいとゆかし檜扇は上達部殿上人のはなやかに引つくろへる束帯のおこそかなるふところにさし入たまひておのづからうつり香清らなり歌人のもてはやす扇合せのみやびたるはしり書なんとゐならぬ墨のにほひなるべしこ丶ろせんなはきためしの杉すらも横目扇につゞるてふ世はと諸平翁の詠めりしはいとよく人情を述られたり中にも白き扇の物替かぬころめでたけれ風さへ清く持人の心の涼しさもおくゆかしきや

伊達　貞子

世に扇ほど幸あるものはあらじ新玉の始のみ空には家々の祝儀として品よく用ゐらるこは富士の高峯の千秋に秀でゝけだかきに似たるをめでゝなるべきか夏の頃み簾まきあげたるきよき高どのの内にやむごとなき君にかしづきあるは水まきたる涼しき庭に向へる椽先にみやびの人にはんべりてこよなきものと稱へらるゝ何れ賴母しからぬはあらじ

岡　佐波子

扇ばかりはかなくあはれなるものはあらざりけりさるはみな月の暑さには地を焦し黄金も鎔かす

といふころこそたれも〳〵賞でまたしみて少しの間も手はなたずこの時にこそあふぎの姿にはありけれやがて秋にもなりふく風もそゞろに身にしむころとなりぬれど早くもろなたざまに箱あるは黒棚などへおしこめられてかへり見るものとてはあらじかし實にもはかなくあはれなるものならずやかく思ひつゞくればをんなの身の上にもよそへられていとも〳〵はかなくかなしうなん

流れては
いもせの山の
なかおつる
吉野の川の
よしや世の中

八月兼題

五日
歌……野露
文……琴を聞く

廿日
歌……庭萩
文……秋田家

●文部省檢定濟

副島伯爵校閲
東久世伯爵著
松本楓湖畫

尋常小學修身入門	全一冊	一冊金二錢八厘
全 教師用	全一冊	一冊金七錢
尋常小學修身書	全四冊	每冊金七錢八厘
全 教師用	全四冊	每冊金十二錢
高等小學修身書	全四冊	每冊金九錢七厘
全 教師用	全四冊	每冊金廿五錢
尋常小學國史談	全二冊	每冊金十錢
高等小學國史	全三冊	每冊金十九錢

發兌所 國光社

女鑑第六十六號目次

女鑑
是非邪正の識別

論說
德川時代女子教育史評論（三）……岡崎遠光
教育の事に就いて女教員に望む所あり……大林弘一郎

史談
阿立阿際……鹽井雨江
江田勝子……藤原忠義

家政
看護法捷徑（四十）……三笠舍主人

漫錄
あらずもがな（六）●鹽井雨江●あうむ文學（八）●檜の舍主人●
日本文學の女傑（二）●山崎庚午●道の志なり歌合（十四）久志
本常幸寄贈
忠孝二筋道（其七）……渡邊乙羽
花菖蒲（其八）……千稻子

文林
歌　近衛忠熈●毛利元德●東久世通禧●佐々木高行●鍋島直大
●前田利嗣●長岡護美●高崎正風●前田利鬯●諏訪忠元●黑川
眞頼●宮地嚴夫●坂正臣●植松有經●小出粲●谷勤●內藤存守
●大口鯛二●林甕臣●三浦千春●石丸忠胤●西川須賀雄●糸山
貞幹●佐々豐水●草野隆道●篠原政稹●鍋島榮子●蜂須賀隨子
●前田朗子●柳原愛子●小池道子●北島以登子●松平健子●諏
訪晴子●田邊わけ子●安東菊子●尾崎すう子●師岡須賀子●海
上壽子●河野文子●諏訪晴子
文…梅雨……橫井知萬多
夏のたのしみ……師岡須賀子
舟なうかべて螢がりする記……竹園女史

雜報
●去月二十日●皇后宮●外事●露國の貴婦人●松尾たせ子●齊
山博士の夫人●褒賞●年迺舍●婦人慈善會

敎の庭
歌文…數十首

餘芳
みちのつと（つゞき）……小池道子
口畫…阿立阿際……富岡永洗
挿畫…忠孝二筋道……高橋松亭

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回 五日 廿日 發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年七月廿九日印刷
同　年同月三十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）